



松江市教育委員会

松江市スポーツ・文化振興財団

島根県松江市教育委員会
公益財團法人松江市スポーツ・文化振興財團

平成 30(2018) 年 9 月

松江市文化財調査報告書 第 187 集

市道才軽尾線道路整備事業に伴う発掘調査報告書

海崎古墳群

二〇一八年九月

市道才軽尾線道路整備事業に伴う発掘調査報告書
海崎古墳群

松江市文化財調査報告書 第187集

市道才軽尾線道路整備事業に伴う発掘調査報告書

海崎古墳群

平成30(2018)年9月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例　　言

- 本書は、平成 29 年度に実施した市道才軽尾線道路整備事業に伴う海崎古墳群の発掘調査報告書である。
- 本書で報告する発掘調査は、松江市都市整備部土木課から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
- 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

(名 称) 海崎古墳群

(調査地) 島根県松江市美保関町美保関 1244 番 1

- 現地調査の期間

平成 29 年 8 月 22 日～平成 29 年 11 月 14 日

- 開発面積及び調査面積

開発面積 : 38,292.0m²

調査面積 : 131.6m²

- 調査組織

依頼者 松江市都市整備部土木課

主体者 松江市教育委員会

教育長 清水 伸夫

【平成 29 年度】 発掘調査業務

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 藤原 亮彦

〃 次長（まちづくり文化財課長兼務） 永島 真吾

〃 まちづくり文化財課

〃 専門官（埋蔵文化財調査室長兼務） 飯塚 康行

〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係長 赤澤 秀則

〃 " " 主幹 川上 昭一

〃 " " 学芸員 三宅 和子

〃 " " 曹託 門脇 誠也

調査指導 島根県教育庁 文化財課 調整監督 真治

主任主事 人見 麻生

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 清水 伸夫

埋蔵文化財課 課長 曾田 健

〃 調査係 係長 川西 学

〃 " 調査員 廣瀬 貴子（担当者）

〃 " 調査補助員 門脇 祐介

【平成 30 年度】 報告書作成業務

事務局	松江市歴史まちづくり部	部長	藤原 亮彦
	"	次長	永田 明夫
	まちづくり文化財課	課長	飯塚 康行
	" " 埋蔵文化財調査室	室長	宮本 英樹
	" " 調査係	係長	川上 昭一
	" " "	主幹	川西 学
	" " "	学芸員	三宅 和子
	" " "	嘱託	門脇 誠也
調査指導	島根県立松江北高等学校	教諭	大谷 晃二
実施者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財團	理事長	清水 伸夫(～5月27日) 星野 芳伸(5月28日～)
	埋蔵文化財課	課長	赤澤 秀則
	" 調査係	調査員	廣瀬 貴子(担当者)
	" "	調査補助員	門脇 祐介

7. 調査に携わった発掘作業員

井川洋、石倉光子、金坂昇、近藤可奈、作野富士夫、高橋保夫、福田健一、見崎伸男、
峰谷一雄

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。

金坂昇、須藤佳奈子

9. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教授、ご協力を頂いた。
記して謝意を表する。(順不同、敬称略)

島根大学法文学部	教授 大橋 泰夫
"	准教授 岩本 崇
"	准教授 平郡 達哉
出雲弥生の森博物館	館長 花谷 浩
島根県立八雲立つ風土記の丘	所長 松本 岩雄
島根県立三瓶自然館	学芸員 中村 唯史
島根県立古代出雲歴史博物館 交流・普及課	課長 角田 徳幸
島根県埋蔵文化財調査センター	内田 律夫

10. 本書の執筆は、第1章を松江市埋蔵文化財調査室が、第2章～第6章を廣瀬が執筆した。また、
編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て廣瀬が行った。

11. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

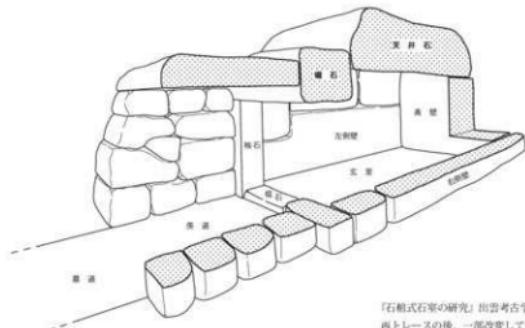
[須恵器]

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会

大谷見二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『平田市埋蔵文化財調査報告書 第8集 上石堂平古墳群』島根県出雲土木建築事務所 島根県平田市教育委員会

なお、本書に掲載した遺物の時期は、上記の2書、大谷氏の編年から出雲〇期と記載する。

12. 本書に掲載する土層は、『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修：財団法人日本色彩研究所 色票監修に従って表記した。
13. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベルは海拔標高を示す。
14. 本書における遺構記号は以下のとおりである。
SK：土坑 SD：溝
15. 本書で掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮率とスケールを明記した。遺物実測図の縮率は、須恵器・土師器は基本1/3とし、破片の大きい須恵器の断片や横瓶は1/4、1/6としている。また、石製品も1/3、金属製品は1/2、玉類、金環は等倍とした。断面は土師器を白ヌキ、須恵器を黒塗り、鉄製品・石製品の断面を網掛けで示した。
16. 横穴式石室の各名称は下記の図を参照。
17. 報告書作成は、遺構図、遺物図はIllustratorCS6(Adobe社)で作成し、図版レイアウト、原稿執筆などの編集作業はInDesign(Adobe社)で行った。
18. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。



「石棺式石室の研究」出雲考古学研究会 1987年より
再トレスの後、一部改変して使用。

横穴式石室各部の名称

目 次

例言

第 1 章 調査に至る経緯.....	1
第 2 章 位置と歴史的環境.....	2
第 1 節 地理的環境.....	2
第 2 節 歴史的環境.....	2
第 3 章 調査の方法と概要.....	6
第 1 節 調査の方法と経過.....	6
第 2 節 調査の概要.....	6
第 4 章 調査の成果.....	10
第 1 節 1号墳.....	10
第 1 項 墳丘.....	10
第 2 項 土層と墳丘の築造.....	10
第 3 項 埋葬施設.....	13
第 4 項 遺物出土状況.....	14
第 5 項 出土遺物.....	14
第 6 項 時期.....	20
第 2 節 2号墳.....	23
第 1 項 墳丘.....	23
第 2 項 箱式石棺.....	24
第 3 項 遺物出土状況.....	24
第 4 項 出土遺物.....	24
第 5 項 時期.....	26
第 3 節 3号墳.....	28
第 1 項 墳丘.....	28
第 2 項 外護列石.....	31
第 3 項 埋葬施設.....	31
第 4 項 遺物出土状況.....	33
第 5 項 出土遺物.....	35
第 6 項 時期.....	37
第 4 節 土坑と溝.....	37
第 5 章 総括.....	40
第 1 節 遺構.....	40
第 1 項 群構成・墳丘.....	40
第 2 項 埋葬施設.....	40
第 2 節 出土遺物.....	42
第 3 節 時期.....	42
第 4 節 海崎 3号墳の墳丘築造過程の検討	43
第 5 節 島根半島東部における海崎古墳群.....	44
第 6 節 海崎古墳群の系譜.....	48
第 7 節 結語	50
遺物観察表.....	52
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第 1 図	島根県・松江市位置図	1
第 2 図	海崎古墳群周辺の遺跡分布図	5
第 3 図	開発範囲・調査範囲図	7
第 4 図	調査前地形測量図	8
第 5 図	遺構配置図	9
第 6 図	1号墳全体図	11
第 7 図	1号墳土層断面図	12
第 8 図	1号墳石室実測図	15-16
第 9 図	1号墳遺物出土状況図	17
第 10 図	1号墳 T6・T12 遺物出土状況図	18
第 11 図	1号墳出土遺物実測図①	19
第 12 図	1号墳出土遺物実測図②	21
第 13 図	1号墳出土遺物実測図③	22
第 14 図	2号墳全体図	23
第 15 図	2号墳土層断面図	25
第 16 図	箱式石棺実測図	26
第 17 図	2号墳遺物出土状況図	27
第 18 図	2号墳出土遺物実測図	27
第 19 図	3号墳全体図	29
第 20 図	3号墳断面図	30
第 21 図	3号墳南東側外護列石実測図	32
第 22 図	3号墳北東側外護列石実測図	33
第 23 図	3号墳石室実測図	34
第 24 図	3号墳遺物出土状況図	35
第 25 図	3号墳出土遺物実測図①	36
第 26 図	3号墳出土遺物実測図②	37
第 27 図	調査区北東側平坦面実測図	39
第 28 図	1号墳石室復元図	41
第 29 図	3号墳丘模式図	44
第 30 図	島根半島東部の竪穴系横口式石室・石棺系竪穴式石室・横穴式石室	47
第 31 図	伯耆西部の竪穴系横口式石室・横穴式石室・遺物	49

挿表目次

表 1	島根県内の短甲出土例	42
表 2	海崎古墳群の時期	43
表 3	美保関町における古墳時代後半期古墳	45
表 4	美保関町における竪穴系横口式石室・石棺系竪穴式石室の構造	46
表 5	美保関町における横穴式石室の構造	46

本文中写真

写 真 1	海崎古墳群から大山を望む	2
写 真 2	現地説明会風景	6
写 真 3	1号墳天井石等検出状況	10
写 真 4	左側壁腰石加工痕	15-16
写 真 5	左側壁腰石加工痕	34

写真図版目次

- 図版 1 海崎古墳群調査前全景（北東から）、海崎古墳群調査後全景（北東から）
図版 2 1号墳調査前全景（南から）、1号墳調査後全景（南西から）
図版 3 1号墳丘南東側（T3）b-b' 土層断面（南東から）、1号墳玄室右側壁裏側（南東から）
図版 4 1号墳丘c-c' 南東側土層断面（南東から）、1号墳丘c-c' 北東側土層断面（北東から）
図版 5 1号墳玄室（北東から）、1号墳玄室左側壁（南東から）
図版 6 1号墳玄室左側壁と閉塞石（北東から）、1号墳玄門（北東から）
図版 7 1号墳玄室右側壁（北西から）、1号墳玄室奥壁（南西から）
図版 8 1号墳南西側（T6）石材・遺物検出状況（南西から）、
1号墳南西側（T6）石材・遺物検出状況（北西から）、1号墳南西側（T6）遺物出土状況（南西から）
図版 9 1号墳南西側羨道部石材検出状況（南西から）、1号墳羨道部石材検出状況（北西から）
図版 10 1号墳羨道部（東から）、1号墳羨道部腰石検出状況（東から）、1号墳羨道部腰石検出状況（南西から）
図版 11 2号墳完掘状況（北東から）、2号墳南東側（T2）土層断面（北東から）
図版 12 箱式石棺検出状況（北西から）、箱式石棺完掘状況（北西から）、箱式石棺掘方完掘状況（北西から）
図版 13 3号墳完掘状況（北東から）、3号墳南西側法面上土層断面（南西から）
図版 14 3号墳玄室（南西から）、3号墳玄室奥壁（南西から）
図版 15 3号墳玄室左側壁（南から）、3号墳玄室右側壁（南西から）
図版 16 3号墳玄室天井石（南西から）、3号墳玄室右袖石（西から）
図版 17 3号墳南東側外護列石（南から）、3号墳北東側（T8）外護列石と周溝（北東から）
図版 18 3号墳北東側（T8）土層断面（北東から）、3号墳T8南西端土層断面（東から）、
3号墳T8南西側土層断面（北東から）
図版 19 SK01 完掘状況（北西から）、SK02 完掘状況（北西から）、SK03 完掘状況（南から）
図版 20 SD01 完掘状況（北から）、T5 完掘状況（北東から）、T7 完掘状況（南東から）、T1 完掘状況（北西から）
図版 21 1号墳出土遺物①
図版 22 1号墳出土遺物②
図版 23 1号墳出土遺物③、2号墳出土遺物①
図版 24 2号墳出土遺物②（箱式石棺）、3号墳出土遺物

第1章 調査に至る経緯

県道境美保関線と才浦地区及び輕尾地区を結ぶ市道才輕尾線は、地区的重要な生活道路でありながら、幅員が狭く急勾配で視距も悪く、線形も基準を満たしていないため、松江市都市整備部土木課は平成23年度から道路改良事業に着手した。

設計にあたって、市道才輕尾線に隣接して周知の遺跡である海崎古墳群が存在することから、平成24年5月23日に土木課と松江市埋蔵文化財調査室は現地にて協議を行った。この際、古墳の範囲を確認し、谷側に道路を拡幅することによって古墳に影響を及ぼさないよう設計することを依頼した。しかし、設計を進めたところ、工法及び費用の面から谷部を埋めて道路拡幅工事を行うことは困難であり、古墳の一部を掘削し拡幅工事をせざるを得ない結論に達した。

このため、再度土木課と埋蔵文化財調査室が協議した結果、古墳を掘削する範囲においては本調査を実施することとし、平成29年5月8日付で市土木課より県教育長宛てに埋蔵文化財発掘の通知が提出された。この通知に対し、県からは5月16日付で発掘調査を実施するよう勧告があり、平成29年8月22日から本調査を開始した。



第1図 島根県・松江市位置図

第2章 位置と歴史的環境

第1節 地理的環境（第1図）

海崎古墳群は、松江市美保関町美保関に所在し、島根半島の東端に位置している。

島根半島は、大部分が北山山地と呼ばれる山地である。北側沿岸部は、山地が迫り深い入り江になった海岸となっている。一方、南岸部は美保湾と中海、そしてそれを繋ぐ境水道に面している。山地は急斜面で落ち込み、山地間にわずかな沖積が続く比較的単調な海岸線をなしており、現在も人々の居住域は内湾に面したこうした平地に点在している。耕地は少なく、水田は小起伏丘陵や沖積地に恵まれた地域にまとまってみられる。

本古墳群は、島根半島南岸から北に約300m、美保湾に面した標高約108mの丘陵尾根上に位置している。尾根に隣接して、島根半島の南岸から北岸を繋ぐ市道才輕尾線が通り、重要な生活道路となっている。3基の古墳は、南西から北東方向にのびる尾根線に沿って縱列の配置をとっている。古墳の南東側は美保湾に面した急峻な斜面で、沿岸には海崎港の集落がある。また、美保湾を介して島取県の海岸線や、『出雲国風土記』に「火神岳」と記載されている島取県の大山（伯耆富士）からその裾野まで広く眺望することができる。

第2節 歴史的環境（第2図）

島根半島東部で知られている遺跡は、中海から境水道、美保湾の北側沿岸に多く、日本海側には少ない状況にある。縄文の遺跡であるサルガ鼻洞窟住居跡（49）や権現山洞窟住居跡（40）は国指定の遺跡として知られている。



写真1 海崎古墳群から大山を望む

縄文時代 中海北西岸に位置する夫手遺跡（57）では、縄文時代早期から晩期の土器や木製品が多く出土している。なかでも漆液容器は、縄文時代前期初頭において漆工文化が存在していたことを示す。サルガ鼻洞窟住居跡からは、縄文土器をはじめ石器、骨角器、装身具、獸骨、貝類など多くの遺物が出土し、前期から晩期までほぼ継続した遺跡である。池の尻遺跡（51）、早田遺跡（52）からも前期の土器や石製品が採集されている。北浦松ノ木遺跡（61）は、島根半島北側の低湿地の遺跡である。この遺跡では、竪穴建物跡や墓壙が検出され、土器や石製品、獸骨、魚骨、人骨が出土している。中期後葉から後期初頭の遺跡である。権現山洞窟住居跡、小浜洞窟遺跡（36）は、後期から晩期の遺跡で、土器や石製品、骨角器が出土している。晩期は、井戸遺跡（47）、郷の坪遺跡（29）から突堤文土器が出土している。

弥生時代 先にあげたサルガ鼻洞窟住居跡、小浜洞窟遺跡、井戸遺跡、早田遺跡では弥生時代の土器が採集、出土している。小浜洞窟遺跡では、弥生時代前期・中期の甕や壺が出土し、なかでも弥生時代の完形の甕は、土器棺に使用された可能性が考えられている。早田遺跡、井戸遺跡では中期の土器が採集されている。サルガ鼻洞窟住居跡では後期の土器が採集されていることから、弥生時代にも何らかの形で利用されていたことが窺われる。他に、海崎古墳群の南東側 700m に位置する四谷遺跡（8）からは、弥生時代中期、後期の甕や高坏が、さらに、東側 1km に所在する美保神社の美保神社境内遺跡（10）からは後期の甕が見つかっている。日本海側では、稲積遺跡（21）から弥生土器が採集されている。

古墳時代 島根半島東部で確認されている古墳は多いが、発掘調査が行われたものは少ない。美保関町内の古墳の形態をみると中小規模の円墳や方墳で、前方後円墳や前方後方墳は中海北西側の松江市長海平野縁辺の丘陵に多い。測切古墳群（70）の 1 号墳は全長 33.1m の前方後円墳、2 号墳は全長 20.5m の前方後方墳である。また、藤田古墳群（58）の 1 号墳は全長 33.5m の前方後方墳、2 号墳は全長 28.6m の前方後円墳、堀越古墳群（56）の 4 号墳は全長 23.8m の前方後円墳である。これらは中期の古墳で、比較的大きな墳丘規模をもつことから、単に長海平野のみを支配していたとは考えにくく、おそらく長海平野を拠点として中海周辺の広範囲を支配していた権力者とされる。美保関町に所在する弥陀谷古墳（11）も中期の古墳と考えられている。詳細は不明だが、5 世紀中頃の鉄製三角板鋸留の短甲が出土している。

後期では、海崎古墳群の南東側丘陵に位置する天神社裏山古墳群（2）がある。古墳は小規模な円墳が丘陵尾根上にみられ、4 基の石室と 13 基の円墳が確認されている。石室のうち 2 基は、石棺系竪穴式石室である。横穴式石室をもつ古墳は、男鹿古墳（15）、奉加谷古墳群（17）、長浜道古墳（16）、雑子古墳群（68）、早稲田古墳（67）、福浦法田峠 2 号墳⁽¹⁾（22）などがある。他に、箱式石棺をもつ古墳も多く確認されている。

古墳時代後期の横穴墓としては、本遺跡の東側に位置する中峯山横穴（3）の他、女男岩横穴群（35）、片江横穴群（63）などがある。

郷ノ坪遺跡、伊屋谷遺跡（43）は、境水道に面した遺跡で、製塩土器が出土している。郷ノ坪遺跡では、5 世紀後半から 6 世紀後半にかけて多数の製塩土器が出土し、伊屋谷遺跡では 7 世紀前半から

8世紀頃の須恵器と一緒に採集されており、当該地において製塩が行われていたことを示している。

古代（奈良時代・平安時代） 733（天平5）年に編纂された『出雲国風土記』によれば、当地域は鷦根郡美保郷に属していた。『風土記』にみえる「美保社」は、現在の美保神社で、事代主命と美穂津姫命の二神を祀っている。また、美保郷には戸江剣（38）が置かれていた。剣は交通検査を行う施設で、戸江剣は、現在の美保関町森山の南の浜辺、字閑が推定地である。^{との人のせき}^{ごくしのねしのみこと}^{あはづりゆめのみこと}

発掘調査の成果としては、中海北東岸に位置する尾崎遺跡（53）で8世紀後半頃の礎盤建物や礎石建物が検出され、当該期の須恵器や土錘、墨書き土器が出土している。墨書き土器は、「郷長」、「門家」と書かれ、拠点的施設が存在した可能性が示唆されている。

条里は、中海北東岸の下宇部尾条里制遺跡（54）や北西側の長海条里制遺跡（59）でその痕跡を窺うことができる。

中世・近世 中世の遺跡は、蕨峰遺跡（46）や間谷遺跡（48）の製鉄遺跡が挙げられるが、少量の鉄滓採集のため時期などは明確ではない。

山城では、権現山城跡（37）、横田山城跡（45）、鈴重山城跡（32）、忠山城跡（60）が確認される。前者の三箇所の城跡は、境水道の北岸に位置し、いずれも尼子氏の本拠地であった富田城へ通ずる制海権確保のため攻防の拠点となった砦跡である。忠山城跡は、標高290mに位置する。忠山の頂からは中海を超えて遙か南方に富田城が所在する山々が眺望でき、尼子・毛利の戦いにおいて、尼子勝久が尼子再興のため隠岐から出帆し、陣をおいたとされるところである。

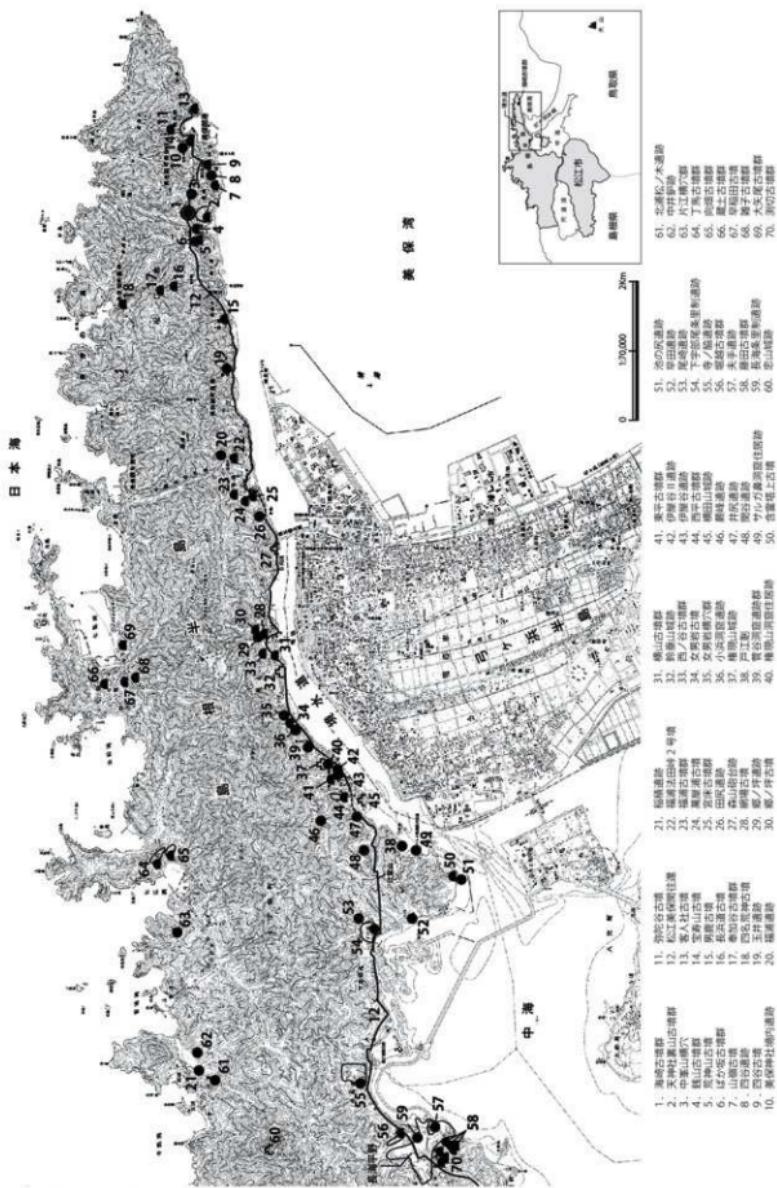
近世の道、松江美保関往還（以下、往還）は、松江市街から美保関に至る道である。美保関町を通る往還は、山が多く急峻な崖が中海や日本海に張り出し、通行には困難を極めたという。特に下宇部尾から森山にかけての辻堂山越えは難所であったとされる。この往還の東端の美保関港は、松江藩が番所を置き、為替蔵を建てさせ、通商を奨励していた。本遺跡の南東側を通る市道才軽尾線は、この往還と一部重複しており、往還が古くにさかのぼり、こうした場所に古墳群が造られたと思われる。

【註】

1. 福浦法田跡2号墳は、松江市美保関町福浦に所在する古墳である。古墳時代後期の円墳で、主体部は横穴式石室である。古墳の概要については、本文中に後述する。

【参考文献】

- 島根県教育委員会・中国電力株式会社 2009 『尾崎遺跡』
- 島根県教育委員会 1999 『島根県歴史の道調査報告書第10集 歴史の道調査報告書』
- 島根県古代文化センター 2014 『解説 出雲国風土記』
- 島根県教育委員会 2014 『解説 出雲国風土記』
- 島根県松江市教育委員会・公益財團法人松江市スポーツ・文化振興財団 2018 『福浦法田跡2号墳』
- 松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 2000 『夫手遺跡発掘調査報告書』
- 本庄地区町内連合会・本庄公民館 1994 『郷土誌 ふるさと本庄』
- 美保関町誌編さん委員会 1986 『美保関町誌』
- 吉村雅雄 1995 『尼子・大内・毛利六十年戦史』



第2図 海崎古墳群周辺の遺跡分布図 (S=1:70,000)

第3章 調査の方法と概要

第1節 調査の方法と経過

海崎古墳群は、南西から北東方向の尾根に3基の古墳が所在している。

まず最初に伐採を行い、平成29年8月16日から調査前の地形測量を実施した。本事業の開発範囲は市道に隣接する古墳群の北東側から南西側の墳端部であり、その範囲を本調査範囲としたが、隣接する市道の法面部分については、安全面を考慮して1～2m程の緩衝地を設けた。また、古墳の規模を確認するため開発範囲外についてもトレーニングを設定した。

本調査範囲の掘削深度については、調査前に行った松江市都市整備部土木課との協議で、基本は開発法面より深く掘削しないこととなっており、丁張を設置し法面角度に留意しながら調査を実施した。但し、各古墳と調査区北東側平坦面には土層観察のトレーニングを掘削し、このトレーニングについては地山面まで掘り下げている。この土層観察により遺構面を判断し、また、トレーニング調査についても随時行い、調査を進めていった。調査面積は、131.6m²である。

遺物の取上げや実測はトータルステーションを用い、土層断面についてはレベルを用いて手作業で測量を行った。

調査が終わりに近づき、成果が明らかになった平成29年10月28日に現地説明会を開催し、11月14日にすべての作業が終了した。



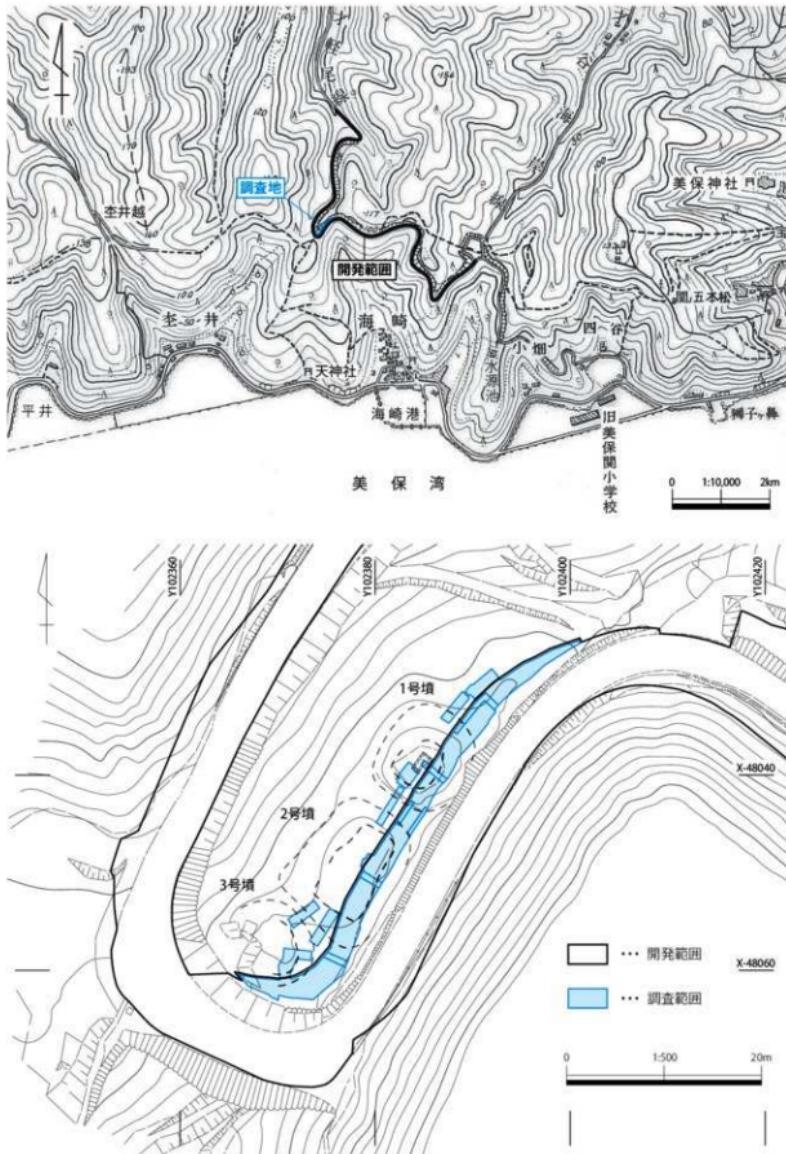
写真2 現地説明会風景

第2節 調査の概要

海崎古墳群は、尾根上に築造された古墳である。北東から南西にむかって1号墳、2号墳、3号墳で、いずれの古墳も北東から南西側墳端部は市道により削られている。また、1、2号墳の一部に電柱の埋設による攪乱を受けているところが確認された。

調査前の地形測量から、1、2号墳が方墳、3号墳が円墳と考えられた。1号墳と3号墳の石室は既に開口しており、1号墳は竪穴系横口式石室、3号墳は横穴式石室をもつものである。

調査の結果、いずれの古墳も腐葉土とわずかな堆積土を掘削するとすぐに墳丘面となり、墳端部には橙色土や黄褐色土の土層が堆積していた。1号墳では石室の南西側に羨道部が付設されることや構築方法が明らかになった。羨道部は、後世の進入により攪乱され、搔き出された土層（第7図5・6層）から遺物が多く出土した。出土遺物の時期には幅があり、追葬や祭祀があったものと考えられる。但し、羨道部は床面まで掘削していない。2号墳では中心主体部は確認できなかったが、墳頂部北東側平坦面から小形の箱式石棺を検出し、墳丘面直上や盛土から須恵器、土師器が出土している。3号墳では外護列石や墓道を確認している。外護列石は墳丘の北東側、南東側に設定したT8、T9、T11で

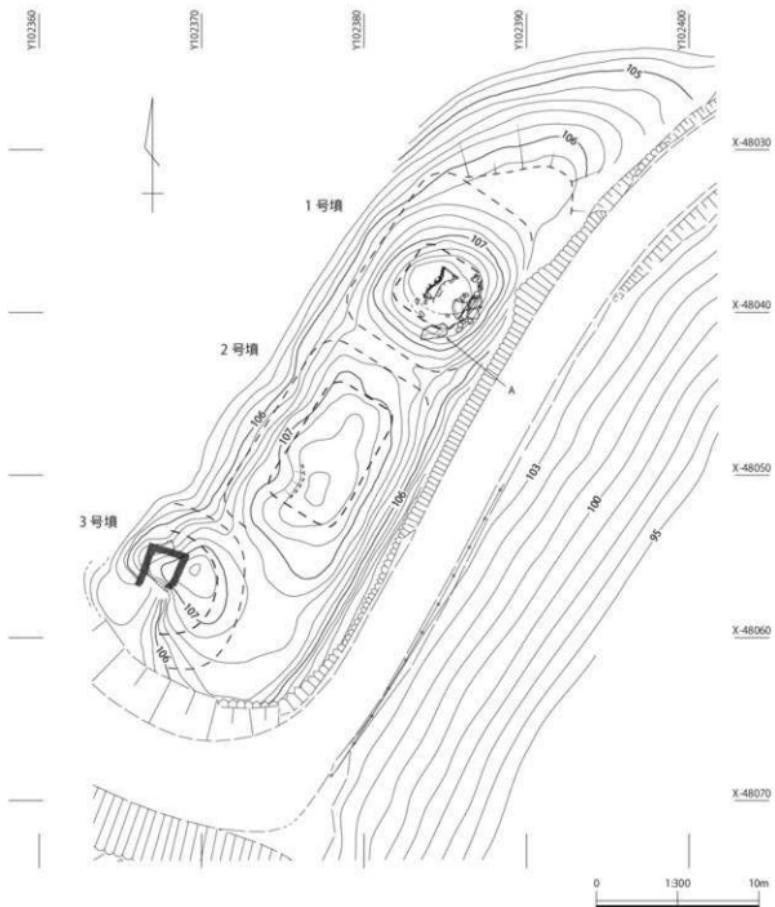


第3図 開発範囲・調査範囲図 (S=1:10,000・1:500)

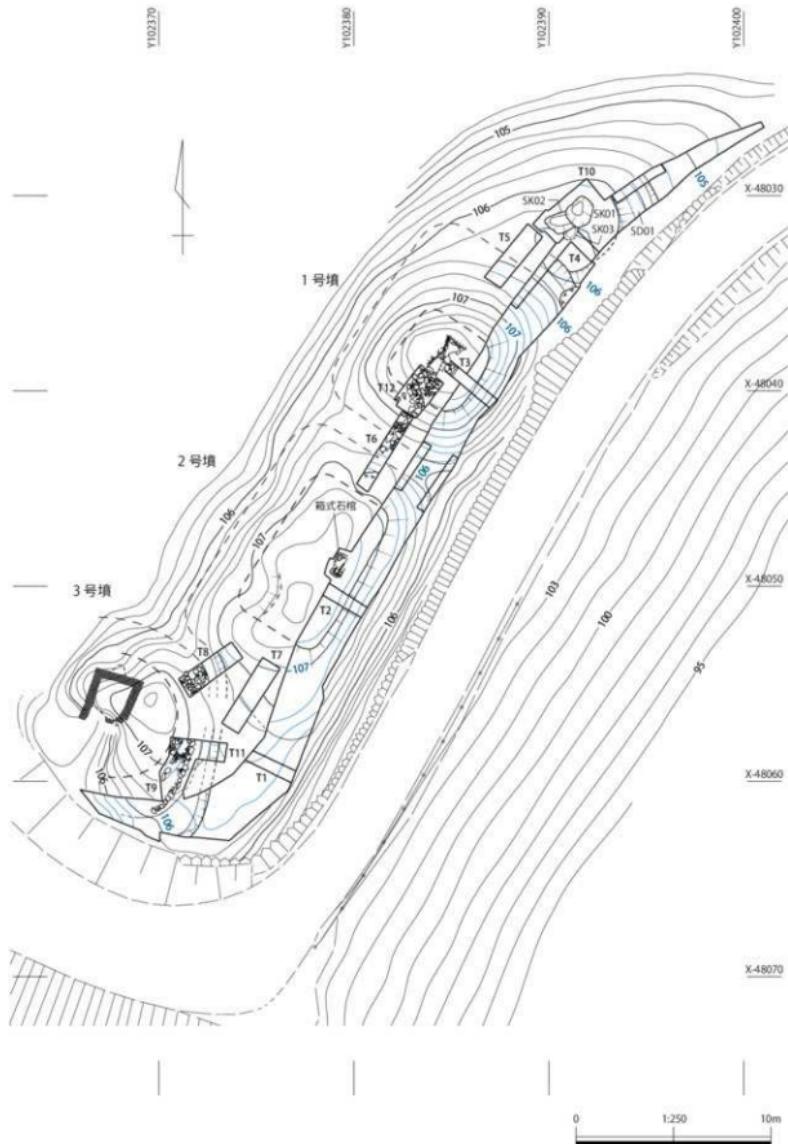
検出しており、このうち南東側T9、11については2段であった。遺物は、表土や地山直上から須恵器が出土し、その多くは縁片である。また、玄室内に設定したサブトレンチから金環が1点と小玉1点が出土している。

他に、1号墳北東側には平坦面や緩斜面がみられ、3基の土坑と溝を検出している。

なお、開口していた1号墳石室については、遺構保護の観点から土による埋め戻しを行った。



第4図 調査前地形測量図 (S=1:300)



第5図 遺構配置図 (S=1:250)

第4章 調査の成果

第1節 1号墳

第1項 墳丘（第6・7図）

1号墳は、南西から北東方向に延びる丘陵尾根上の北東側に位置する。尾根方向11m、尾根直角方向9mの方墳である。墳丘の北西から南東側は市道により削られている。現状での高さは1.8～2.0m、最高所の標高は108.0mである。

埋葬施設は竪穴式横口式石室で、すでに天井が開口した状況にあり、墳丘地表面の北東側から南東側にかけて天井石や側壁石材と思われる石が散在していた（写真3参照）。散在する石の一部は玄室の天井石と考えられ、『美保関町誌』（1986年。以下、『町誌』と記載）の写真図版には、2枚の天井石が確認される⁽¹⁾。その1枚は、第4図のAの石材と思われ、幅0.8m、長さ1.5m、厚さ15cmを測る。



写真3 1号墳天井石等検出状況

墳丘北東裾では区画溝を検出した。この溝の規模は、幅1.5m、深さ0.2m（底面標高105.9～106.0m）を測り、礫をやや含む明黄褐色土（7層）や橙色土（8層）が堆積していた。この土層から甕片が出土している。区画溝の堆積土は北東側墳端部に設定したT5でも確認し、甕片や壺蓋が出土している。南東側では1号墳と2号墳との間に浅い区画溝が検出された。

第2項 土層と墳丘の構造（第7図）

1号墳の土層断面、第7図をみると、1、2層は表土、3、4層は軟らかい土層で後世の攪乱による二次的な堆積土や墳丘の流出土と思われる。5、6層は、羨道部から区画溝にかけて確認される土層である。この土層からは、石材と遺物が混在した状態で検出されている。遺物に時期幅があることから、進入の際に掻き出された土層と考えられる。7、8層は北東側区画溝堆積土、9～23層は墳丘の構造や石室の構築に係わる土層である。

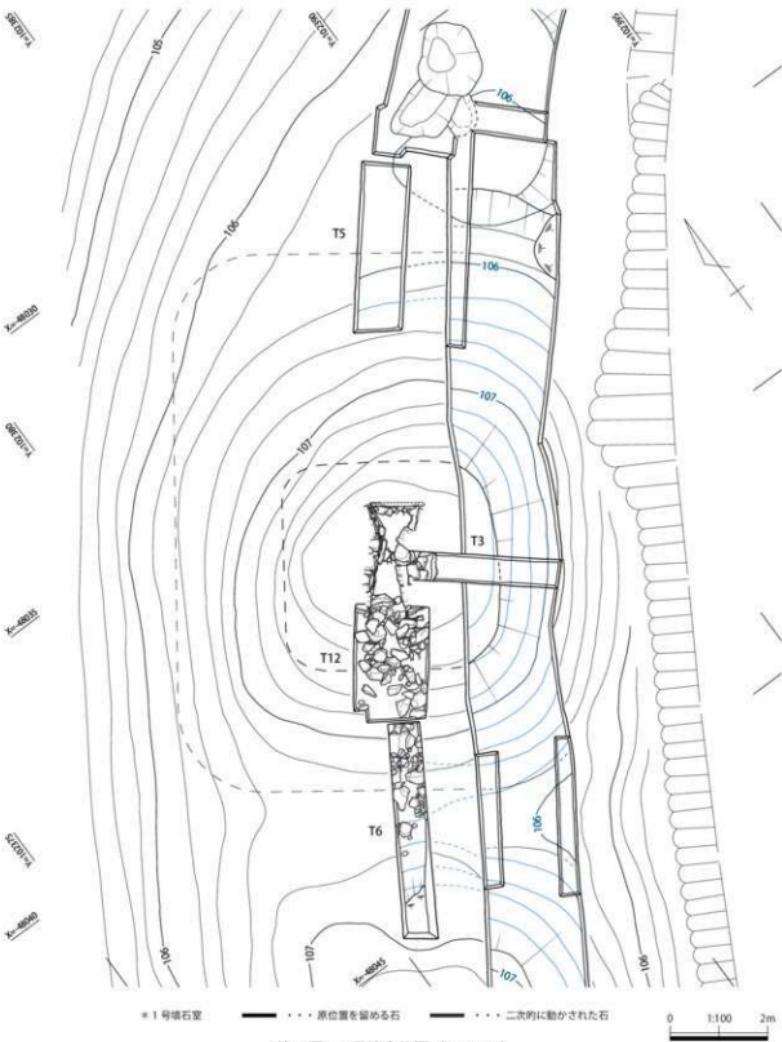
今回の調査では、南東側トレンチ（T3）土層断面（b-b'）や断ち割りした土層断面（c-c'）から墳丘、石室の構築過程について概ね明らかにできた。以下、石室南東側側壁を中心に築造過程について述べる。

- ① 第7図c-c'をみると、旧地表いわゆるブラックバンドはみられないことから、最初に丘陵の尾根を地山（岩盤）まで削り出して平坦面を作る。
- ② b-b'をみると、石室の設置場所を決め、側壁の腰石を据える部分を掘り窪める。腰石を据え、岩盤礫を多く含む土層（23層）を盛って、腰石を固定する。
- ③ 腰石の上に3～4枚の板状の石を積む。板石の間には、橙色の粘質土（15層）が確認され、

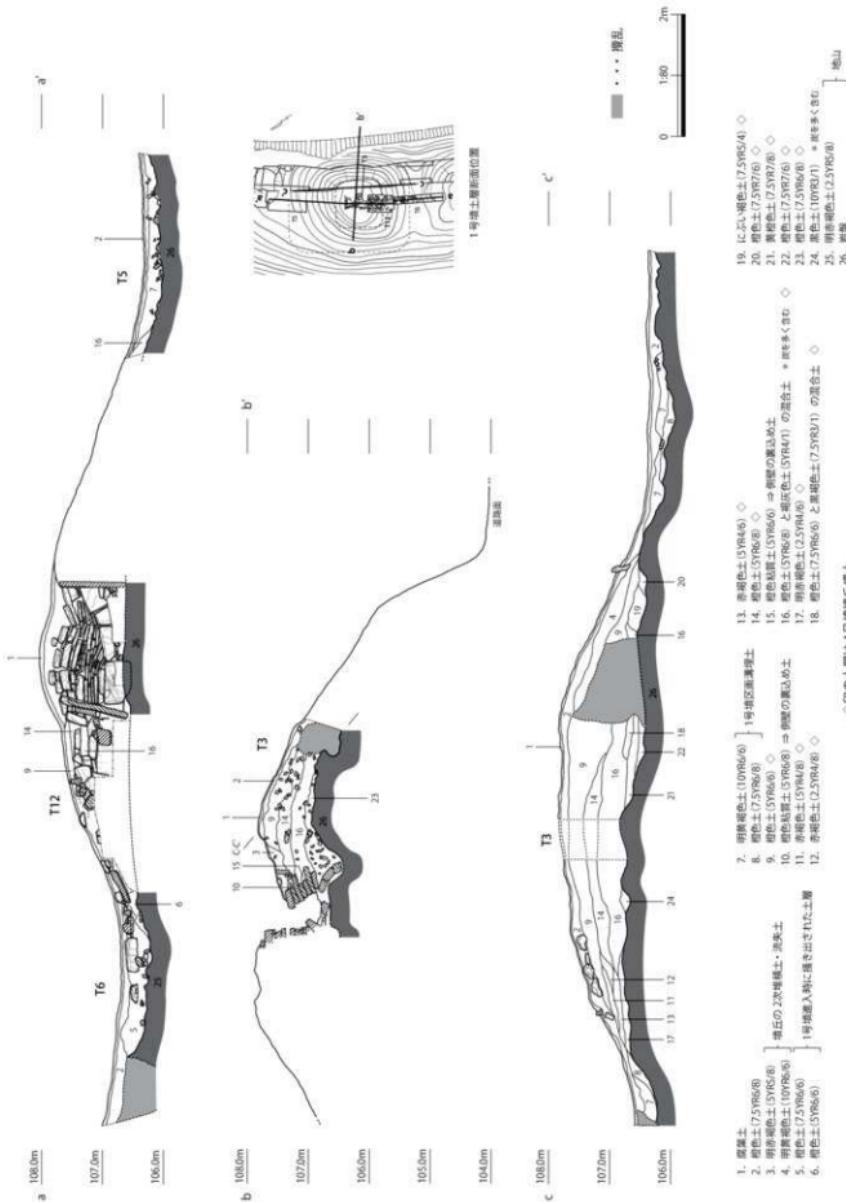
粘質土を埋め込むことにより固定し、積石した高さまで盛土（16層）を施す。

④ ③を繰り返すことにより、石室を構築しながら墳丘を築造する。盛土の厚さは1.2m以上。

その後、主体部に天井石を架構して石室を完成させ、盛土を施して墳丘を完成させたものと考えられる。



第6図 1号墳全体図 (S=1:100)



現況で、T3で確認した石室右側壁の腰石は折れている。腰石は、厚さ10cm程度のものであり、上部及び盛土からの圧により折れ、石室の大きな内傾につながったものと考えられる。墳丘構築過程の土層には、作業面は確認できなかった。

第3項 埋葬施設（第8図）

1号墳の埋葬施設は、墳丘のほぼ中央に構築された竪穴系横口式石室である。町誌では石棺系竪穴式石室とされていたが、羨道が付くことから、今回、竪穴系横口式石室とした。玄室は北東側が奥壁、南西側が玄門である。羨道は玄室の南西側、右側壁に取り付き、片袖状を呈する。

石材は鳥根半島で採取される砾を含む砂岩である。⁽²⁾

1. 玄室（第8図）

玄室は、既に露出した状態で、側壁が内傾し、隅には電柱支線が打ち込まれるなど、遺存状態は良好とはいえない。玄室内には、厚さ約10cmの堆積土の下に岩盤の床面がある。床面の標高は106.8mを測る。玄室の内法は、奥行き2.0m、幅は奥壁側で1.0m、玄門側で0.8mである。玄室の高さは、左側壁の残存高が1.2mを測る。主軸方位はN-39°E、平面形は玄室比1.9と縦長長方形プランを呈する。

奥壁には幅1.0m、長さ0.9m以上、厚さ10cm程度の一枚石が据えられている。側壁は、最下段に長さ60～70cm、幅40cmの石材3枚（腰石）を横長に据え、側壁基底部としている。奥壁を腰石で挟み込みように据え、この上段に厚さ4～13cmの板石を10～13段小口積みにし、側壁としている。板石石材は、上部にいくにつれ厚めのものが使用されている。右側壁も同様であるが、基底腰石の折損により、内傾していることは前述のとおりである。また、右側壁の奥壁側腰石は、内傾した際に内側にずれたものと思われる。なお、腰石には表面を平滑にした際の加工痕が観察された。

2. 玄門（第8図）

玄室閉塞部には2枚の板状の石材が立てられている。2枚の石は玄門部の左側に重なるようにあり、その右側は右側壁との間に20cm程度の隙間が確認され、砾が落ち込んでいた。玄室側の閉塞石は、長さ1.13m、幅68cm、厚さ10cmを測る。閉塞石は地山面を掘り窪め据えている。玄門部北西側では、玄室腰石と羨道腰石間に20cm程度の空隙を作り、閉塞石の受部をしつらえている。羨道側のもう1石は、長さ、幅ともに40cm、厚さ10cmの板石である。この石は、本来右側壁側に置かれていた閉塞石で、進入の際に動かされたものではないかと推察している。

3. 羨道（第8図）

玄室の南西側に設定したT12では、石材が散在し、攢乱された状況がみられた。この下部で、閉塞石に突き当たる羨道左側壁の一部と思われる石材を検出した。この側壁は、玄室左側壁からすると、やや内側にずれて位置している。扁平な割石が閉塞石から南西方向に1.5m程度並び、石を固定する

ために小石が挟まれていた。これらの石材の下には、長さ90cm、厚さ10cmの板石が確認され、玄室と同じように腰石の上に割石を積んで羨道を構築したものと考えられる。閉塞石の高さからすると、あと数段積まれていたと思われるが、後に取り除かれたものと考えられる。これに対し、右側壁側では、攪乱された状況がみられた。但し、玄門付近では、玄室右側壁が羨道側まで一連の面をなして続くことが確認できた。ここでの羨道幅は50cm程度と狭い。玄門は底面まで掘削していないため、底面については不明であるが、羨道入口まで緩やかに下降しながら続くものと考えられる。羨道部の攪乱土（第7図土層断面6層・橙色土）からは土器や鉄製品、玉類が出土している。

T12の南西側に設定したT6でも遺物と石材が混在した状況が看取された。これらは、羨道や閉塞に使用された石材が、遺物とともに挿き出されたものと思われる。

第4項 遺物出土状況（第9・10図）

1号墳の遺物出土状況を第9、10図に示している。第9図は墳丘全体の遺物出土状況、第10図はT6、T12の遺物出土状況である。両図をみると、羨道があった墳丘南西側、特にT6、T12や表土からの遺物が多い。これらの遺物は、多時期の遺物が混在していることや同一個体の破片が散在していることから、後世の進入や攪乱を受けたことが看取される。

遺物が多いT6、T12からは、須恵器、金属製品、玉類や石錘が出土している。具体的には、須恵器蓋環や高环、長頸壺、甕、金属製品の大刀片、刀子片、吊金具、針、玉類の小玉、土師器片である。

他に、石室内の流入土から金属製品（第13図-11）が、区画溝堆積土から須恵器（第11図-8）が出土している。

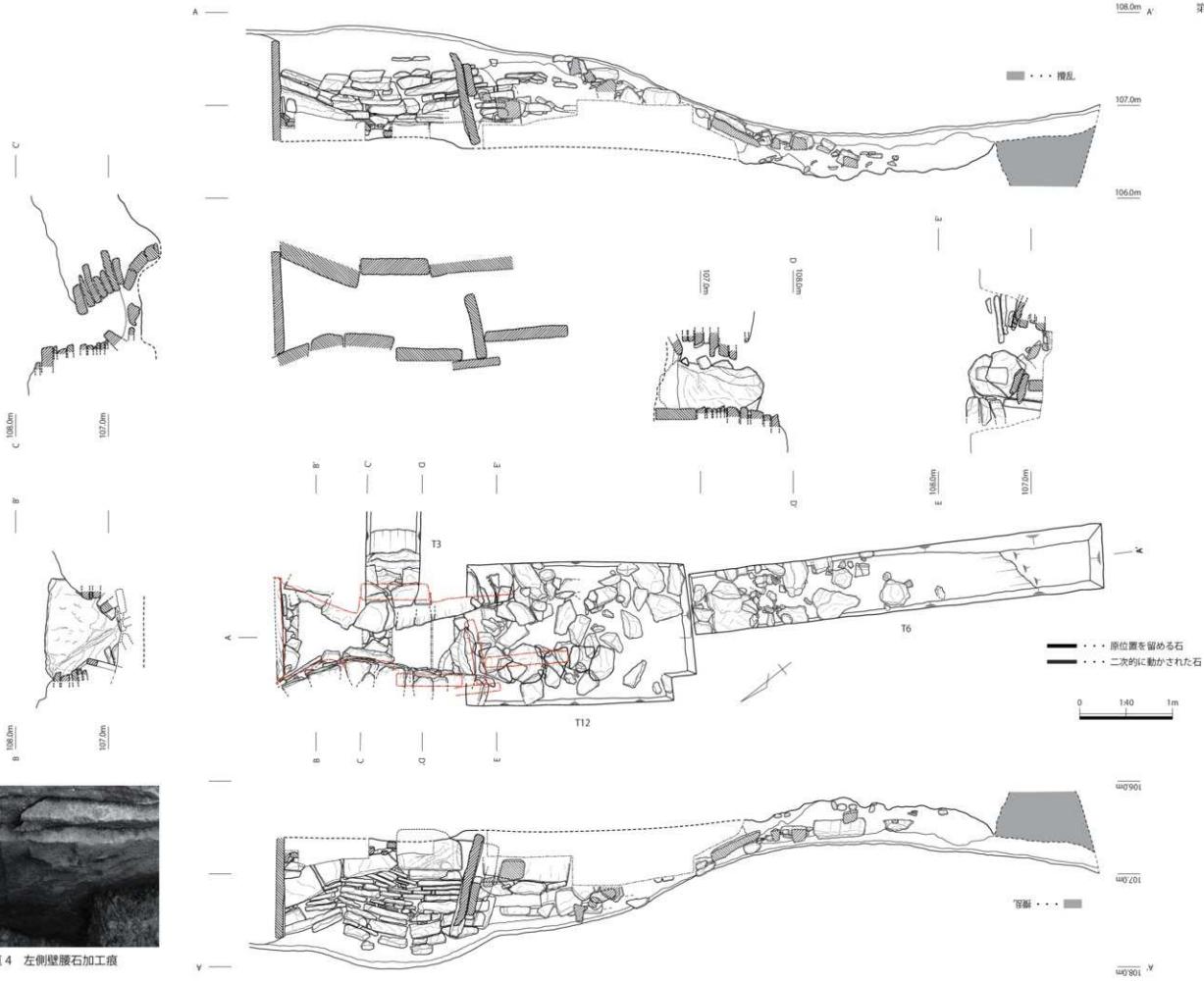
第5項 出土遺物（第11・12・13図）

第11図～第13図は、1号墳から出土した遺物で、須恵器、石製品、鉄製品、玉類である。

11-1～6、8～21は須恵器の蓋環で、1～6、8～14は坏蓋、15～22は坏身である。11-7は、口径や色調、胎土から11-6とセットとなる有蓋高环である。11-1は、口径13.2cmを測る。天井部は回転ヘラ削りを中心部から丁寧に施し、口縁端部の内側には沈線を入れ段状に仕上げている。器壁は薄く、断面は暗紫色を呈する。11-2は、口径13.6cmを測り、11-1より器高が高い。器壁は薄く、天井部のヘラケズリは丁寧である。口縁端部の内側を段状に仕上げている。11-3は、口径12.8cmを測り、口縁は直立気味で、端部を段状に仕上げている。11-4は、口縁が11-3より傾斜するものである。1～4は出雲編年2期である。11-5は天井部で、器壁は厚く、胎土は粗い。中心部にヘラオコシの跡がみられ、周辺にヘラケズリを施している。11-6は、橙色を呈する。口径は12.0cmを測り、天井部にヘラオコシの跡が残る。5、6は出雲4期。11-7は、11-6とセットとなる有蓋高环である。低脚で、脚端部は面をもたず、丸く收めている。三角透かしが2方向にみられ、坏部底面の外側にカキ目が施されている。出雲4期に相当すると考えられるが、脚端部の仕上げやカキ目を施すところは、出雲部でみられる高环と異なる要素である。11-8は、口縁端部を丸く仕上げ、外側に2条の沈線がみられる。出雲4期である。11-9、10は、口縁が外傾し、天井部が丸みをおびた坏蓋である。口径



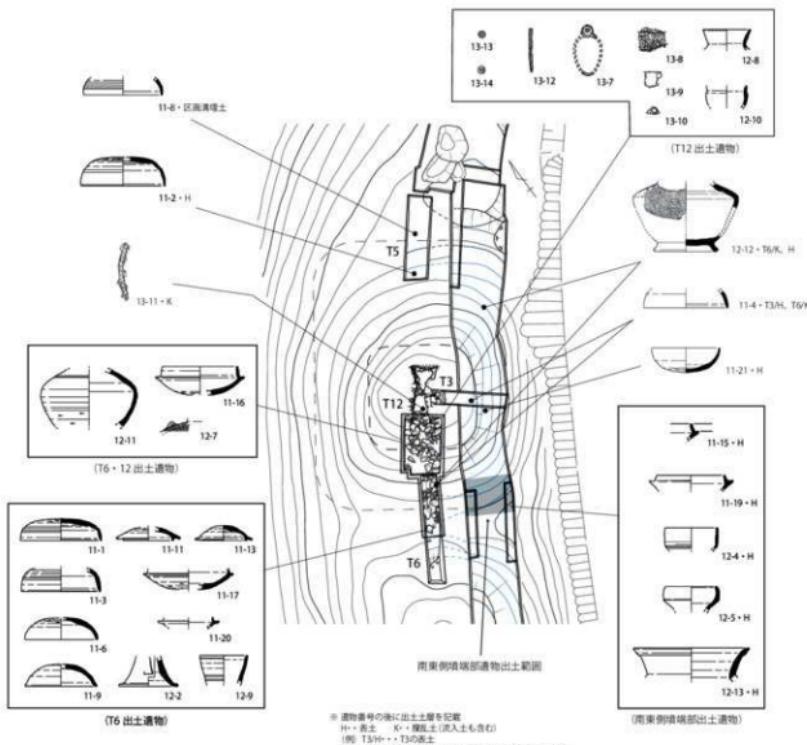
写真4 左側壁腰石加工痕



第8図 1号墳石室実測図 (S=1:40)

は、9が11.5cm、10は12.0cmを測る。天井部の中心はヘラオコシ後ナデ、その周辺は回転ヘラケズリ後ナデを施している。胎土に1mm程度の黒色砂粒を含んでいる。出雲5期の所産と考えられる。このような器形の环蓋は、出雲部ではみられない器形で、米子市の日下古墳群や石州府古墳群で類似品が出土している。11-11～13は口縁内側にかえりをもつ蓋である。口径は、11が8.1cm、12は9.8cm、13は7.1cmを測り、11と12は出雲5期、13は6b・c期と思われる。11-14は口径9.8cmの蓋で、6b・c期である。

11-15～22は环身である。11-15は立ち上がりが高い。11-16は、口径12.2cmを測り、底部外面に丁寧な回転ヘラケズリがみられる。立ち上がりは1.8cmと高い。11-17も底部外面に丁寧な回転ヘラケズリが施され、推定される口径は13cm程度である。15～17は出雲2期の所産である。11-18は、口径10.4cmを測り、16、17よりやや小ぶりであるが、底部外面に中心部から丁寧な回転ヘラケズリが施されており、出雲3期頃と考える。11-19は、口径11cmで、立ち上がりはやや低い。

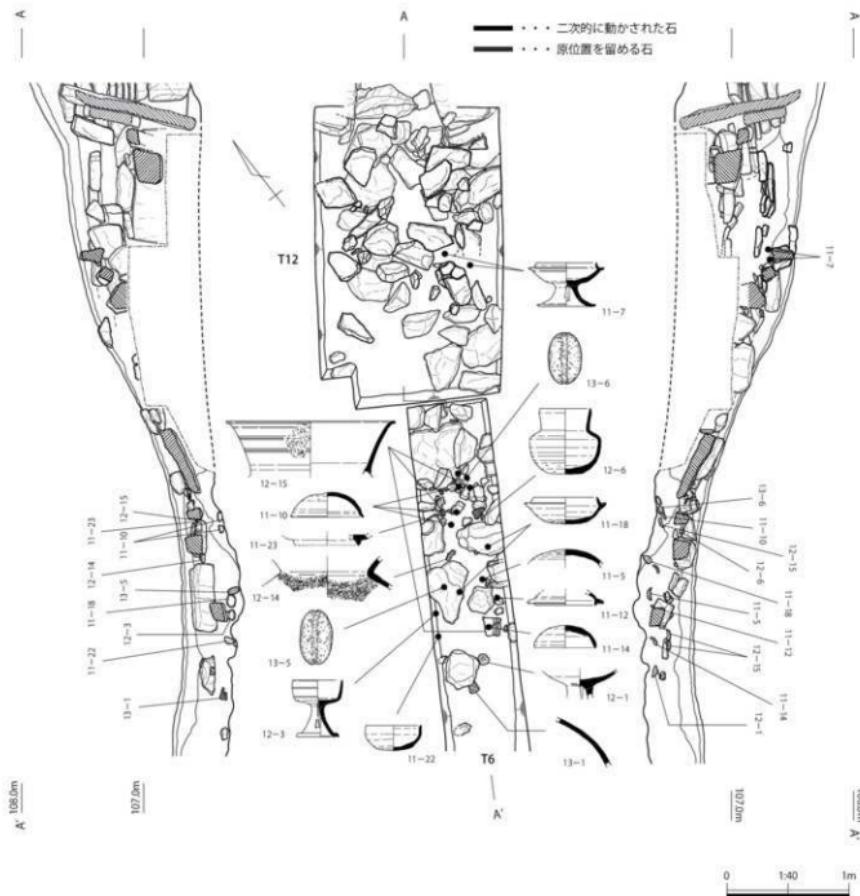


第9図 1号墳遺物出土状況図（平面：S=1:200, 遺物：縮尺不同）

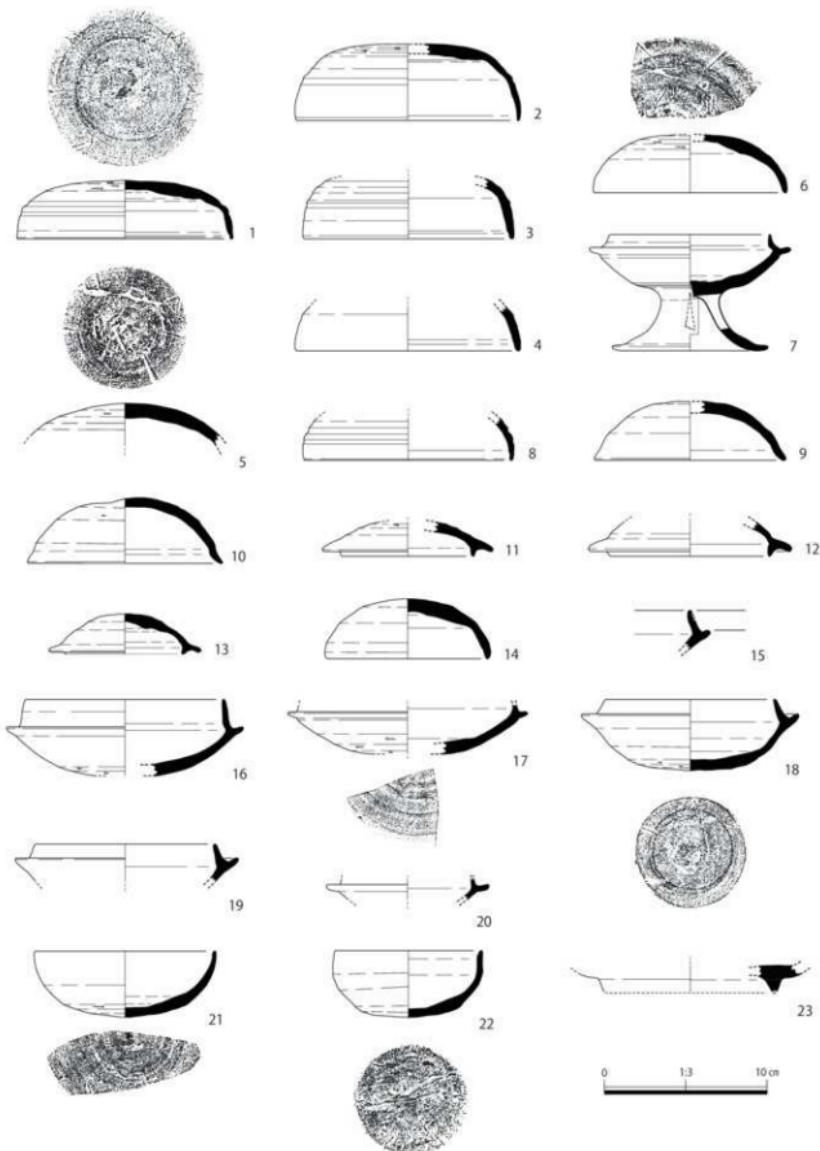
出雲4期頃と思われる。11-20の环身は、推定口径8cm程度と思われる小型のもので、出雲5期である。11-21は丸底の环身として掲載しているが、环蓋の可能性も考えられる。底面の中心にヘラオコシの跡が残り、その外周に回転ヘラケズギがみられる。出雲4期頃である。11-22も口径9.0cmを測る小型の环身で、6b・c期である。

11-23は高台付环の底部で、焼成は悪い。出雲8期の所産である。

12-1～4は長脚無蓋高坏である。12-1は、三角形または切れ目状の透かしが2方向に施されたもので、环部外面にハケ目がみられる。12-2は脚部である。三角形の透かしで、脚端部は丸みをも



第10図 1号填 T6・T12 遺物出土状況図 (平面: S=1:40, 遺物: 縮尺不同)



第11図 1号墳出土遺物実測図① (S=1:3)

つ面をなす。12-3は、2段2方透かしで、上段は切れ目、下段は台形を呈する。脚部に3条、坏部に2条の沈線を廻らせている。12-4は坏部で、外面にカキ目を施す。1、2は出雲4期、3、4は出雲5期に相当する。12-5は、壺の口縁である。口縁部は内湾し、口縁と頸部の境にわずかな稜をもつ。出雲5期頃と思われるが、出雲部ではみられない形態である。12-6は直口壺である。口縁部がやや外傾し、肩部が張るもので、出雲4期である。12-7は、平瓶の把手部分で、出雲5期と思われる。12-8は、口径7.6cmを測る小型の直口壺である。12-9は、長頸壺の口縁部で、2条の沈線が廻る。出雲5期と思われる。12-10は小型の壺で、焼成は悪い。12-11、12は長頸壺である。12-11は、肩の張らない球形に近い胴部もつ。肩部に1条の沈線を廻らせ、胴部下半に回転ヘラケズリを施す。12-12は、高台が付くものである。肩は張り、カキ目を廻させている。11は出雲5期、12は出雲8期に相当する。12-13～15は甕である。13は口径18.7cmを測る。14は頸部から胴部片で、外面に叩き痕、内面は當て具痕を後からナデ消している。15は口径54.6cmを測る大型の甕の口縁部である。2条の沈線を2段に巡らせ、その間に波状文を描いている。

13-1～4は甕片である。叩き痕や當て具痕に違いがみられ、個体の異なる甕片である。當て具痕をみると、一部や全体をナデしている。特に13-2は、ナデ消したことにより内面が滑らかになっている。

13-5、6は有溝石錘である。紡錘形を呈し、長辺方向に1条の溝を彫る。溝の断面は「U」字状である。このような石錘は、北部九州地方の九州型石錘II A類である。⁽¹⁷⁾ 弥生時代中期以降から確認され、出雲部には弥生時代後期になり入ってくる。石材は、いずれもデイサイトで同工品である。

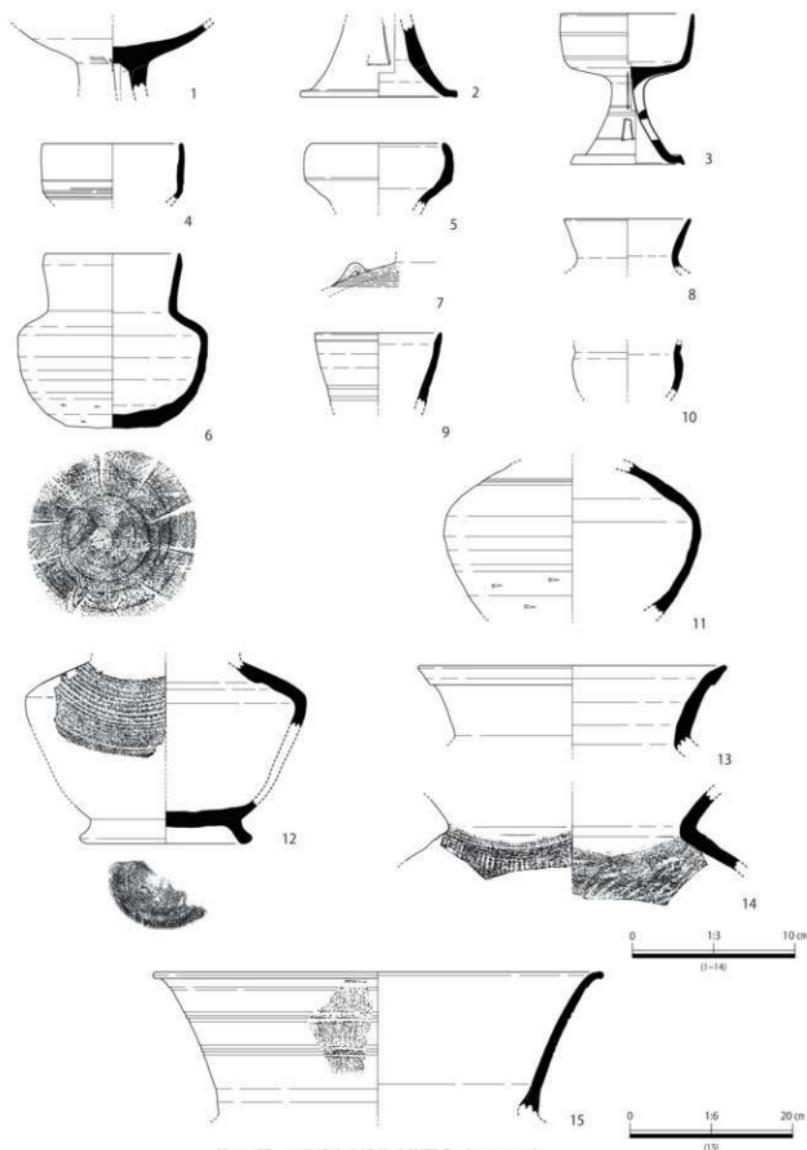
13-7～12は金属製品である。13-7は大刀の吊金具で、吊環と本体の一部である。鉄地で鋲びている。吊環の外径1.1cm、孔径3mm、環本体の幅は8mmを測る。13-8、9は刀子である。8は、刀身の切先に近い部分で、先幅1.9cm、刃厚5mmである。鋒が著しい。9は、刀子の刀身部で、鋒により剥離、欠損している。13-10は、判然としないが、金属板と鉢と思われる破片である。鉢芯の径は4mmである。鉢留の鉄製品があったことになる。13-11は釘で、頭の部分が欠損している。やや曲がり、鋲びている。残存長5.3cm、厚さ0.6cm。13-12は、残存長4.5cm、幅2mmの針状鉄製品である。断面形は矩形を呈する。

13-13、14はガラス製の小玉である。いずれも淡緑色を呈し、13は径3mm、厚2mm、孔径1mm、14は径3mm、厚3mm、孔径1mmを測る。

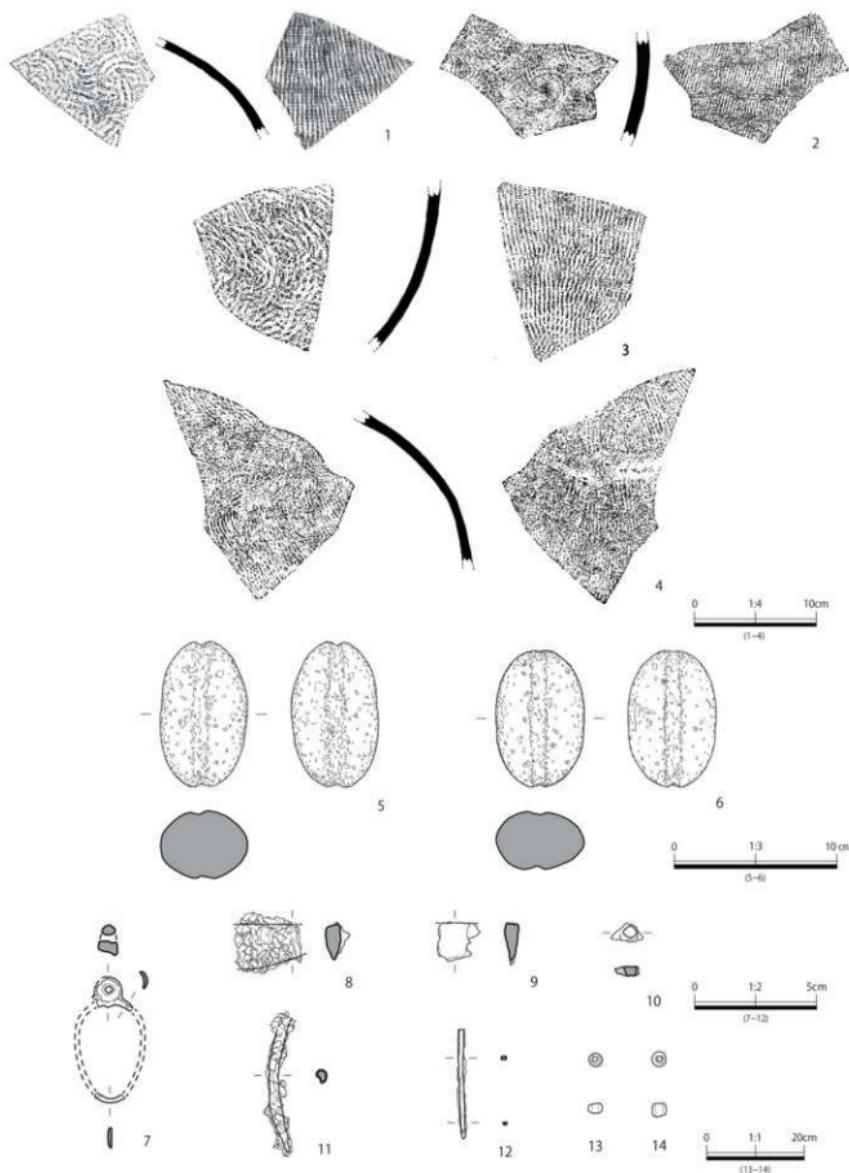
第6項 時期

1号墳は、出土した遺物に時期幅があり、出雲2期から出雲6b・c期までと、出雲8期の遺物がある。出雲2期の遺物が1号墳築造の時期=初葬の時期と考えられる。出雲5期までの遺物が継続的にあることから、狭い石室ながら複数回の追葬が行われたものと考えられる。また、出雲6b・c期の遺物も出土しているが、ここまで追葬を行っていたとは考えづらく、何らかの祭祀がこの時期に行われたものと考えておきたい。

この古墳群では、出雲2期に堅穴系横口式石室が導入されたことになる。追葬は出雲5期まで続けられ、出雲6b・c期、出雲8期には祭祀が行われたものと考えられる。



第12図 1号墳出土遺物実測図② (S=1:3,1:6)

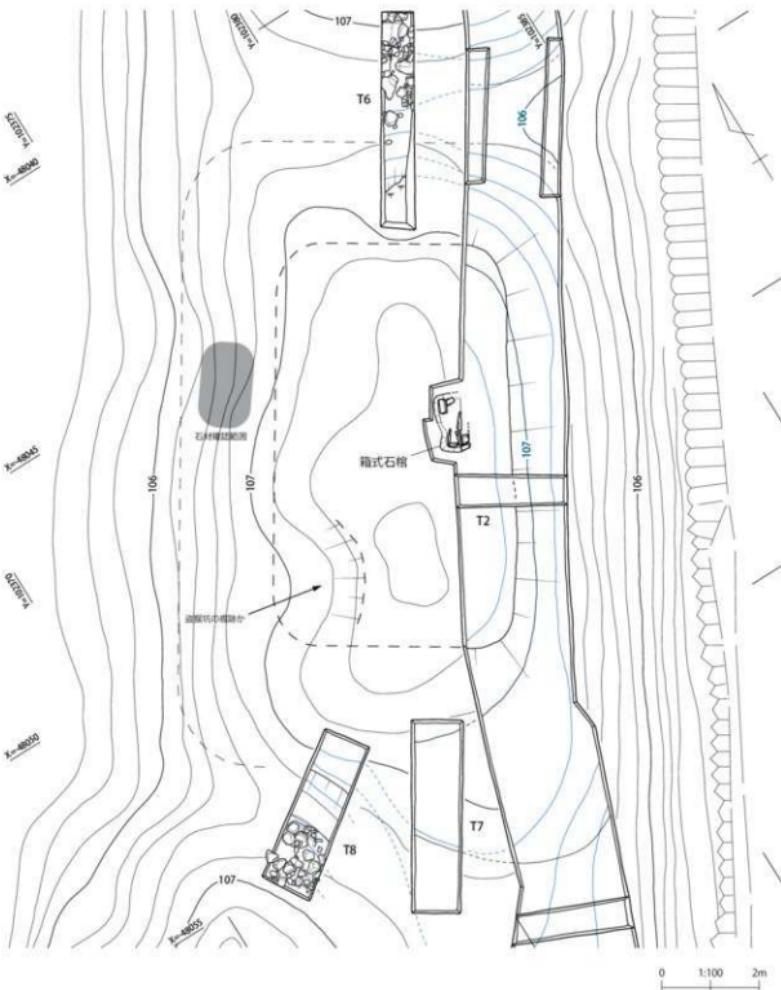


第13図 1号墳出土遺物実測図③ (S=1:1,1:2,1:3,1:4)

第2節 2号墳

第1項 墳丘（第14・15図）

2号墳は、1号墳の南西側に位置する。規模は、現状で南北13.5m、東西10m、高さ1.0～1.4m、最高所標高107.6mを測り、南北方向に長い方墳である。区画溝は、1号墳側では1号墳と共有する形で存在するが、3号墳側は地山の平坦面と3号墳築造に伴う周溝があるのみで、特に2号墳の区



第14図 2号墳全体図 (S=1:100)

画溝は存在しない。中心主体部は今回の調査区外であるが、墳頂部平坦面の北東側で小形の箱式石棺を1基検出している。この箱式石棺については後述する。

2号墳の土層は、T2、T7で観察される。T2は、墳丘南東側のトレンチである。腐葉土直下地山面上に、3層（明黄褐色土）と4層（黄橙色土）が20cm程度の厚さで確認される。この3層上面から箱式石棺を検出していることから、3、4層は2号墳墳丘に伴う盛土と考えられる。T7は、南西側墳端に設定したトレンチである。腐葉土の下には風化土と思われる土層がわずかに堆積する程度で、すぐに水平な岩盤となり、区画溝や堆積土はみられなかった。

2号墳の墳丘は、ある程度の盛土の流失は考えられるが、1号墳のように盛土の厚い墳丘ではない。また、墳丘西側に盗掘された痕跡がみられ、その近くに板石が点在していること、板石を使いながらも1号墳のような墳丘の高さが無いことから、中心主体は箱式石棺のような主体部の可能性が高い。

第2項 箱式石棺（第16図）

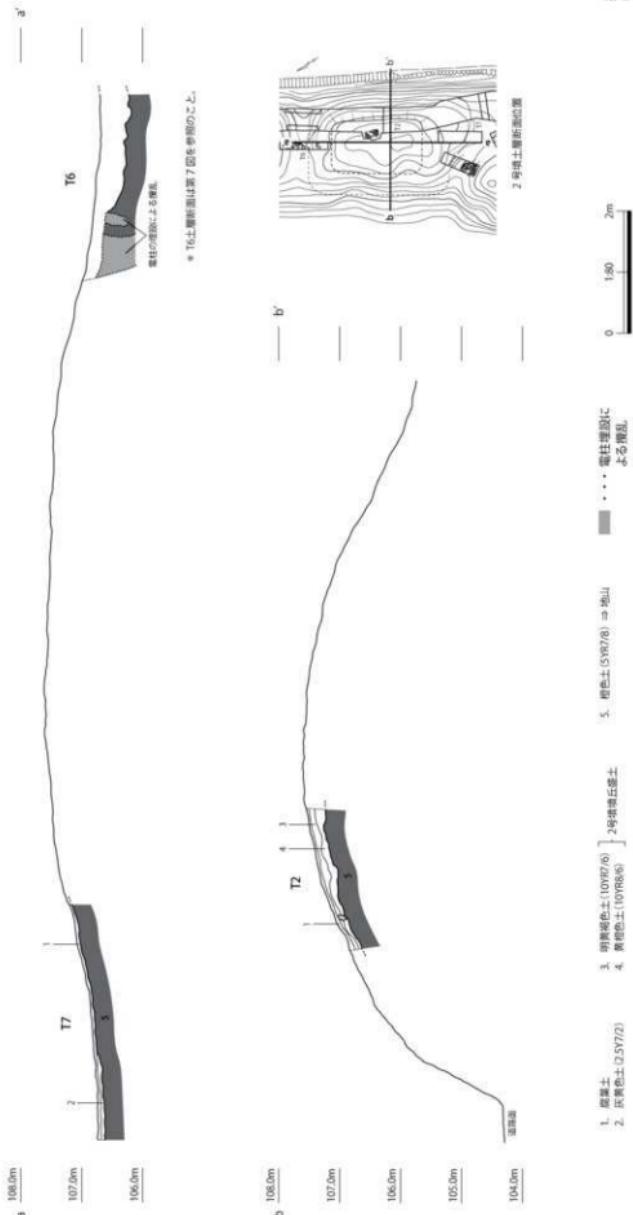
2号墳墳頂部北東側で検出した遺構である。調査区端で2枚の石（石棺南東隅の石）を確認し、周辺の腐葉土を除去したところ、箱式石棺を検出した。検出面標高は107.4mを測る。石棺は腐葉土直下の明黄褐色土面から検出され、この土層が2号墳盛土と考えられることから、墳丘完成後に造られたと言える。両側石の一部は抜き取られており、側石が各2枚、小口石が各1枚ずつ確認される。側石が小口石を挟むタイプで、側石はやや内傾し、北東側小口石は折れていた。最初に石棺の南東側で検出した石は、蓋石または側石と思われる。石棺は、石を設置する位置に長方形形状の溝を掘り、石材を据えている。棺は内法で長さ85cm、最大幅20cm、深さ20cmを測る。遺物は、石棺内と棺外周辺から須恵器片が5点出土し、同一個体の环蓋（第18図-1）であった。この环蓋については、第4項で述べる。この箱式石棺は、2号墳墳頂部平坦面のやや外れた場所に位置し、中心主体とは考えられず、小形であることから小児埋葬、または有機物の埋納土坑と考えられる。

第3項 遺物出土状況（第17図）

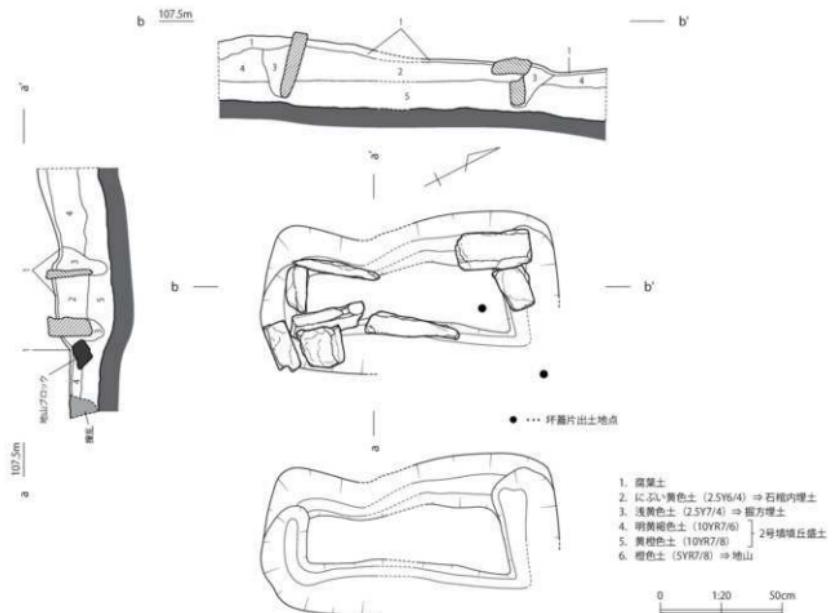
遺物は、北東側墳端、南東側墳頂平坦部の表土または墳丘直上、T2の盛土から、須恵器の环蓋や高环、縦、提瓶、土師器の甕片が出土している。箱式石棺北東側から出土した环身（第18図-5）は、墳丘直上から出土し、箱式石棺に伴う可能性も考えられるが、胎土や色調が異なることから2号墳出土遺物として扱う。

第4項 出土遺物（第18図）

第18図の1～9は須恵器、10は土師器である。18-1は、箱式石棺から出土した环蓋で、口径13.7cm、器高3.8cmを測る。口縁はやや外傾し、天井部はヘラ切り後ナデを行い、その周辺を2～3周雑な回転ヘラ削りを施し、砂粒が浮いている。1号墳から出土した环蓋（第11図-9、10）と類似する器形であるが、口径が大きく、古い段階に位置付けられ、出雲3期に相当しよう。18-2、3も环蓋である。18-2は天井部で、中心から回転ヘラケズリを施しているが浅く、やや丁寧さに欠ける。出雲3期で



第15図 2号填土層断面図 (S=1:80)



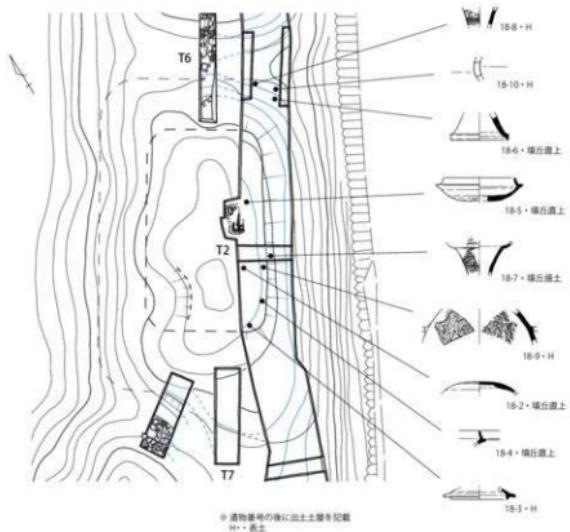
第16図 箱式石棺実測図 (S=1:20)

ある。18-3は、口縁の内側にかえりをもつ蓋で、出雲6b・c期である。18-4、5は、出雲3期の环身である。18-4は立ち上がりが高い。18-5は、口径11.6cmを測る。底面中心部から回転ヘラケズリを施している。18-6は高环の脚部である。端部は平坦面をなし、透かしを有するものと思われる。透かしに隣接して「×」印のヘラ記号がみられる。出雲5期。⁽⁹⁾ 18-7、8は、題の頭部である。18-7は、1条の沈線を廻らせ、波状文を施す。出雲3期である。18-8は、施文などは7と同じであるが、径は小さく若干短いもので、18-7より後出するが出雲3期に含めておく。18-9は提瓶の破片で、把手は欠損している。外面にカキ目、内面に当て具痕がみられる。18-10は、土師器甕の頭部で、肩の張らないものと思われる。調整は風化により不明である。

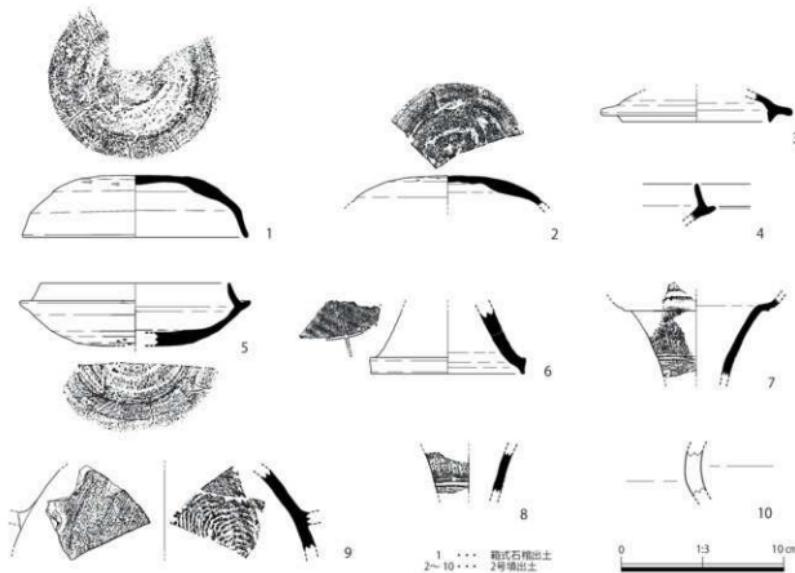
第5項 時期

2号墳から出土した遺物は、大別すると出雲3期、出雲5期、出雲6b・c期に分けられる。18-1、3、4、6、7が、出雲3期のものであり、この遺物の時期をもって古墳築造の時期と捉える。出雲5期、出雲6b・c期の遺物については、追葬または祭祀に伴うものと考えられる。

箱式石棺から出土した遺物は出雲3期に相当し、2号墳築造時期が出雲3期と考えられることから、中心主体とさほど時間をおかず造られたものであろう。



第17図 2号墳遺物出土状況図（平面：S=1:200, 遺物：縮尺不同）



第18図 2号墳出土遺物実測図 (S=1:3)

第3節 3号墳

第1項 墳丘（第19・20図）

3号墳は、2号墳の南西側に位置する。墳丘の南から西側の一部が市道により削られている。主体部は横穴式石室で、既に玄室の一部が露出し、羨道部の天井石などは失われた状態であった。

古墳の規模は、調査前の測量や調査結果から、現状で南北10.2m、東西7.9m、高さ1.8～2.0m、墳頂部標高は107.4mを測り、円墳と考えられた。東西断面（第20図b-b'）をみると、西側の墳丘が流失しているのがわかる。

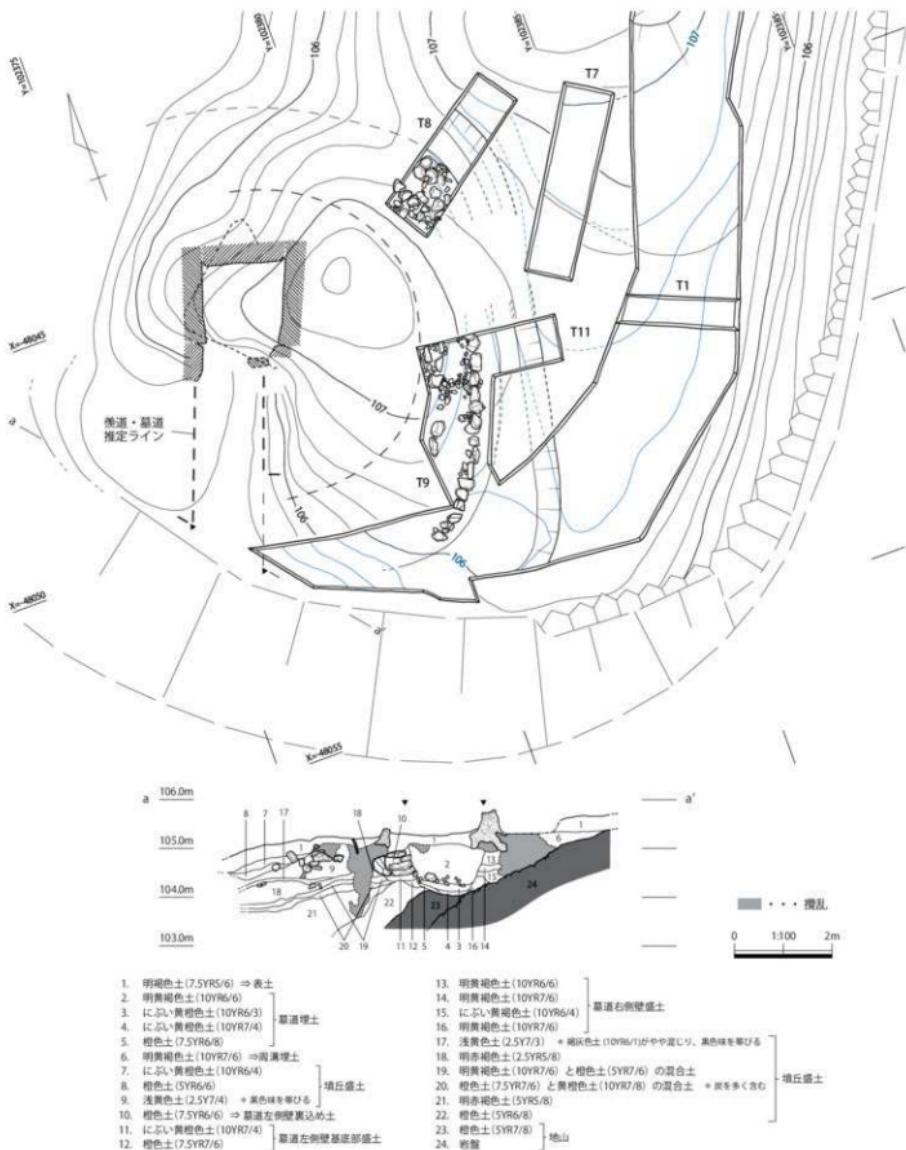
周溝は、墳丘北東側トレンチT8と南東側トレンチT9、11で検出した。T9、11の周溝は北東から南東に向かって傾斜し、底面標高は106.2～106.5m、深さ10～20cmを測る。堆積土は明黄褐色土で、多数の須恵器の甕片が出土している。T8の周溝は、幅1.55m、深さ0.5m、底面標高106.1mである。T7では2号墳南側に溝がないことを確認している。T8土層断面（第22図b-b'）をみると、堆積土は黄色系の土層で、甕片の他、4層から越の口縁が出土している。周溝は底面標高からすると、T11北端あたりを頂点として、T9、T8両側に下降していると考えられる。

墳丘南東側の墳端部（T9・11）には2段の外護列石が、北東側墳端部（T8）には外護列石と礫を含む土層が盛られている状況が確認された。外護列石については後述する。

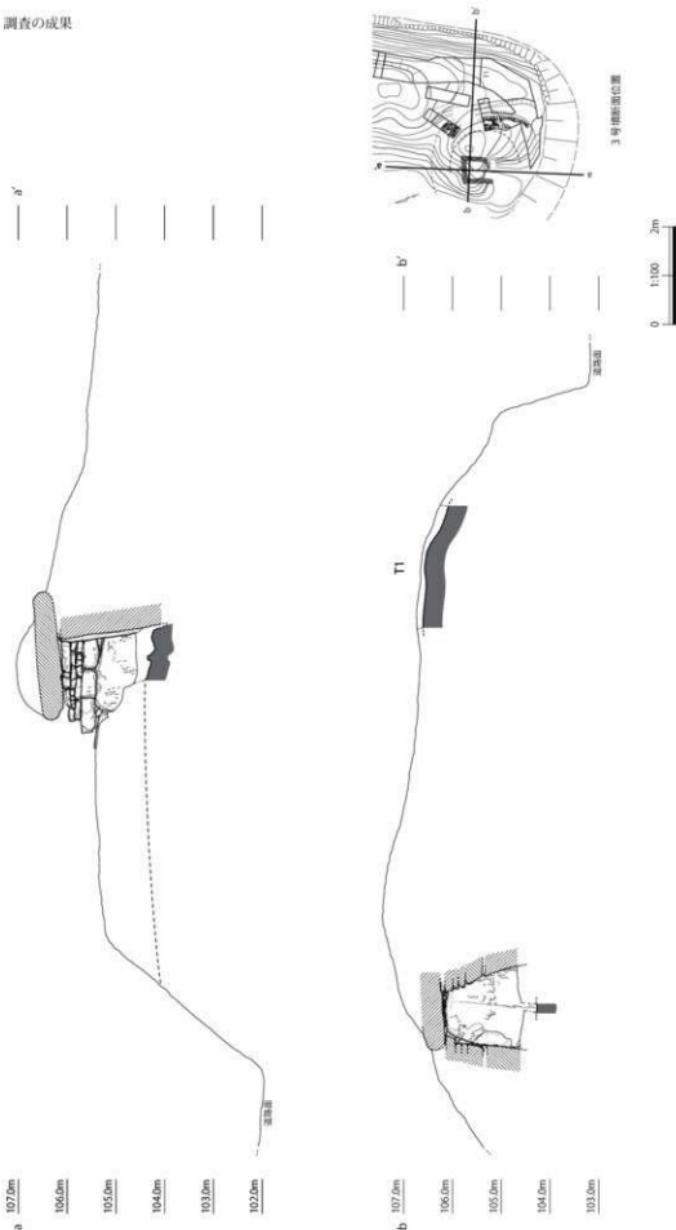
次に、南西側道路法面の土層断面第19図a-a'をみると、U字状の墓道が確認される。墓道は玄室の延長線上に位置し、距離は、現況の右側壁では奥壁から6.3m、左側壁では奥壁端から5.3mを測る。墓道の左側は石積みがみられ、右側壁では盛土のみで石積みはみられず、最初から右側には石を構築していない可能性が考えられる。墓道の規模は、最大幅1.5m、深さ1.0m以上と考えられる。玄室奥壁から石積みに向けてピンボールを刺突すると、左側は石が直線的に続いている。一方、右側は袖石から約2.2mまでしか石がみられず、少なくともこの位置までは両側に石が積まれていることが確認され、ここまでが羨道、この位置から南西側は墓道と考えられる。

この3号墳南西側法面の土層断面（第19図a-a'）では、墳丘築成の一端を垣間見ることができる。土層断面では、地山が南東から南西方向に傾斜しているのがわかる。24層は岩盤、23層は橙色の地山層で、古墳築造前の表土や23層を掘削して岩盤まで削り出し、南西側斜面に盛土（21・22層）をし、さらに17～20層を盛土してフラットな面を造っている。この面の標高は104mあまりで、石室基底部の高さともよく揃う上、17層上面は他の土層と比べると黒味を帯びており、石室構築時の作業面の可能性がある。盛土の19、20層が墓道左側壁基底面に置かれた土層（11・12層）に切られていることから、一定の盛土を行った後に墓道の石積みを構築したものと思われる。石積みは、基底部に11、12層を置き、その上に幅10～40cm、厚さ10～15cm程度の石を5段積み上げ壁面を造っている。10層は壁面の裏込め土である。これに対し、右側は前述したような状況で、盛土のみである。墓道構築後さらに盛土を施し、外護列石を配して墳丘を築造した過程が想定され、T8、T9と同じような外護列石と考えられる石材を含む7～9層が墳丘築造過程の盛土と思われる。

2～5層は墓道の埋土である。2、3層は軟らかく、ボソボソした堆積土である。4、5層は縮まりのある土層で、特に上面が硬化していることから進入面の可能性が考えられ、複数回の追葬が想定さ



第19図 3号填全体図 (S=1:100)



第20図 3号填断面図 ($S=1:100$)

れる。

上記の成果を含め、古墳構築過程は総括で考察する。

第2項 外護列石（第21・22図）

墳丘の南東側（T9・11）と北東側（T8）で外護列石（以下、列石）を検出している。列石は、南東側墓道近くには存在せず、斜面が急であることから流失した可能性も考えられる。列石は二段積みで、大きさ30～40cmの割石や自然石を用いている。一段目は墳端部に、二段目は一段目より40～70cm墳頂部側に存在する。基本は石を一列に置き、その隙間に小礫を詰め固定するものである。

南東側の列石（第21図）をみると、墳端側の列石はやや直線的で、T9あたりから南西側に向かって弧を描くような状況がみられる。T11土層断面（第21図b-b'）から列石の構築過程をみると、北東から南西側に向かって下る地山面に整地土と思われる5層を置き、一段目の石を据えている。続いて約50cm内側に2段目の石を並べる。4層は2段目の列石を覆っており、この段以上に積まれた盛土が流れたもの可能性がある。

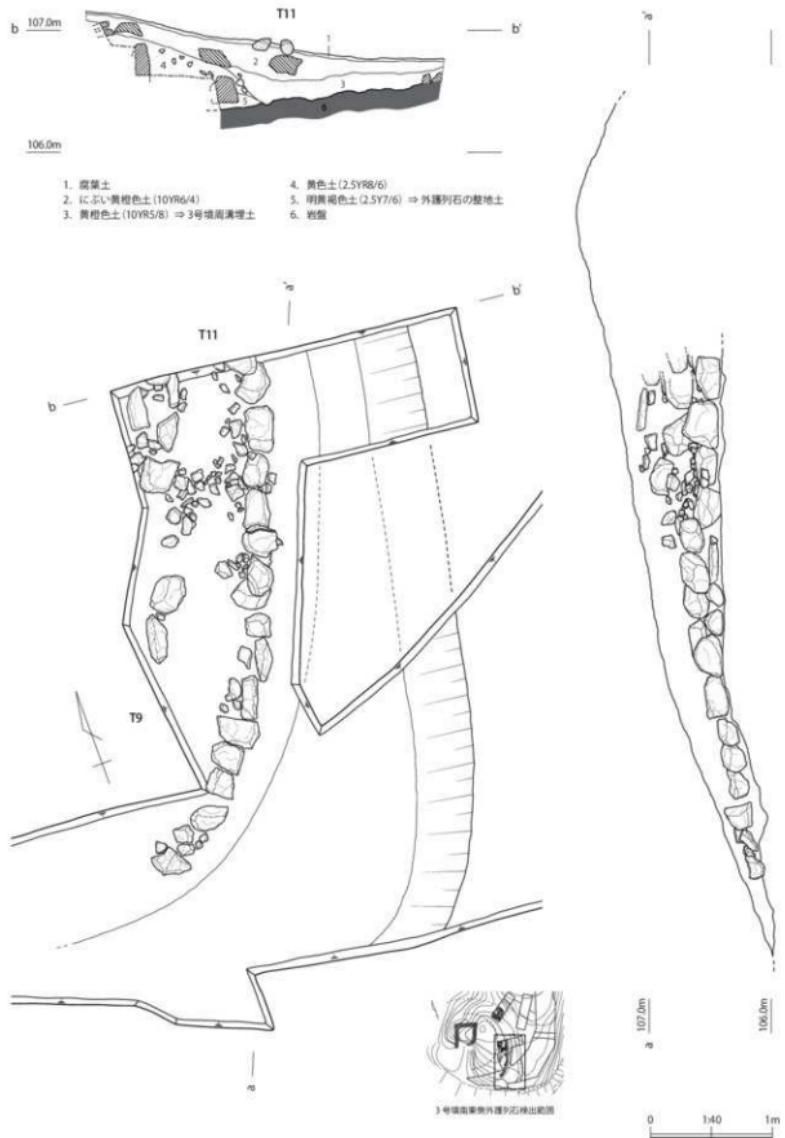
北東側の列石（第22図T8断面）をみると、岩盤まで削り出し、岩盤上に岩盤礫を多く含む土層（11層）を厚く盛土し、その上に10層を積み1段目の石を置いている。さらに盛土（6～9層）を施しながら、2段目の列石を配している。盛土は礫を多く含む黄色系の土層が主体で、その間に8層（黒褐色土）や9層（橙色土）の礫をほとんど含まない土質の違う土を盛っており、墳丘の築造方法として興味深い。これらの列石は、墳丘盛土の流失を防護する目的を兼ねた外表施設と考えられる。

第3項 埋葬施設（第23図）

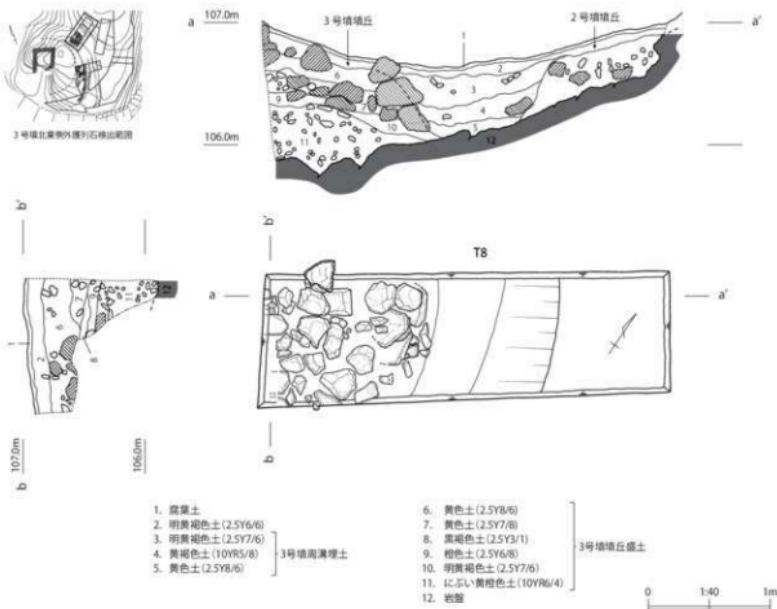
3号墳の主体部は、南西方向に開口する横穴式石室である。玄室は露出しているが、その一部しかみることができない。また、羨道部は埋もれているため不明であり、墓道を南西側道路法面の土層断面で確認している。今回の調査では、あらためて玄室の実測を行い、玄室内にサブトレンチを入れて床面の確認をしている。

1. 玄室（第23図）

玄室は、奥壁に大きな1枚の石を立て、側壁で奥壁を挟むもので、天井石が1枚架けられる。袖石は、右側壁側のみで検出している。右側壁に組み込まれず、自立する形で立てられ、幅40cm、厚さ20cm、奥壁から1.95mに立てられている。石室床面から1mの高さがあるので、それ以上の長さがある。袖石上面から天井石前面までは、約60cmの隙間がある。玄室は、現状で奥行き2.2m、幅は奥壁側で1.7m、玄門側で1.5m、高さ1.9mを測り、主軸方位はN-33°Eである。奥壁は1枚の割石で、高さ1.9m、厚さ20cm以上あり、やや内傾する。正面形は台形を呈し、天井石との隙間に小礫が詰められている。奥壁の一部に穿孔貝による生痕が認められ、海岸近くから運ばれた石材とわかる。側壁は、奥壁を挟み込むようにして腰石を置き、その上に割石を4段、やや持ち送りながら積み上げている。両側壁の腰石は、長さ1.5m、幅1m以上、厚さ20cm以上の石材を横たえたもので、



第21図 3号填南東側外護列石実測図 (S=1:40)



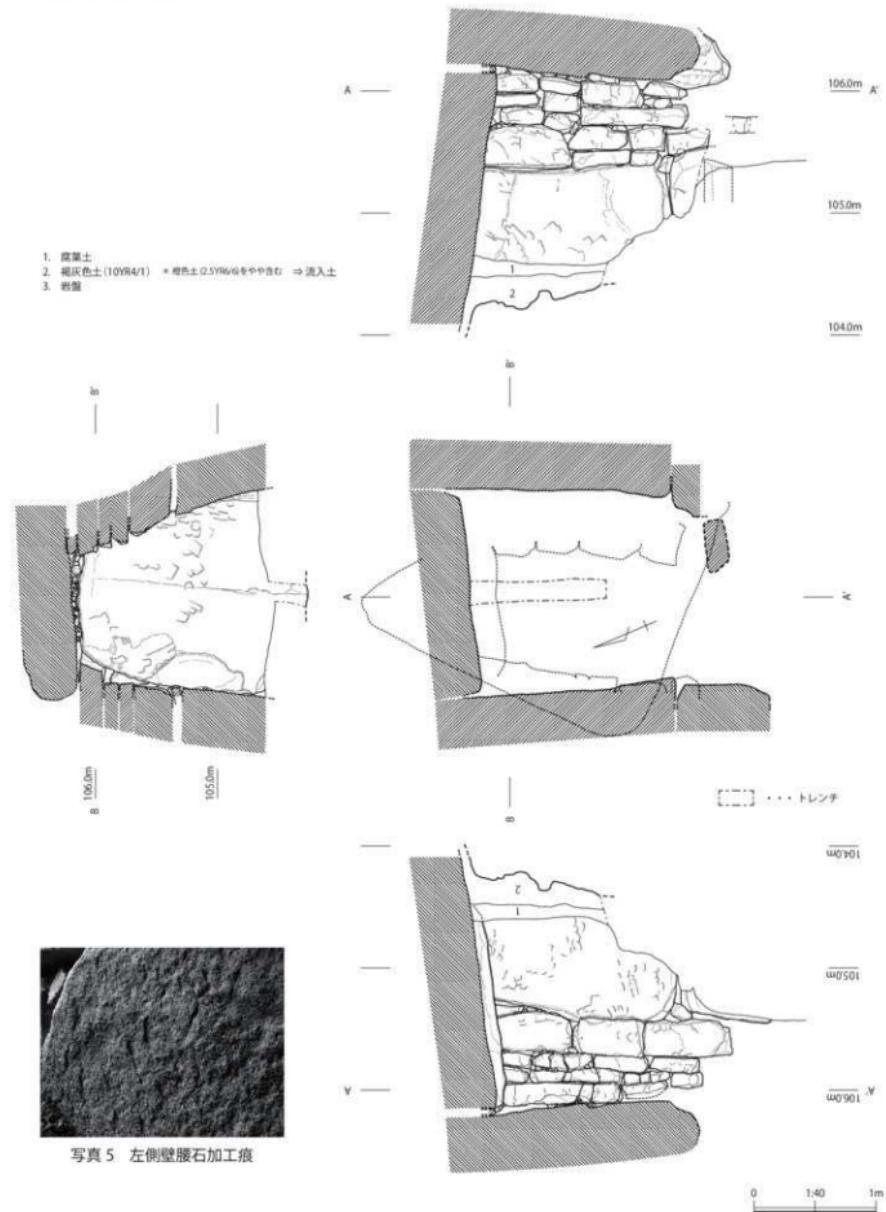
第22図 3号墳北東側外護列石実測図 (S=1:40)

その上1段目に長さ60~70cm、幅30cmの石材を積み、2段目以上には長さ30~80cm、幅10~20cmのやや小形の石材を小口積みにしている。腰石の表面には、石材表面を平滑にした際の加工痕が多く確認される（第23図 写真5参照）。玄室比1.2で、正方形に近い平面形を呈する。天井石は、幅2.2m以上、長さ2.5m、厚さ50cm以上の大型である。全形はわからないが、三角形または四角形状の石と思われる。天井石前面（南西側）に例り込みの加工が施され、この天井石より南西、渓道側に渓道の天井石が架構されていたものと考えられた。なお、楣石の有無は明らかでない。

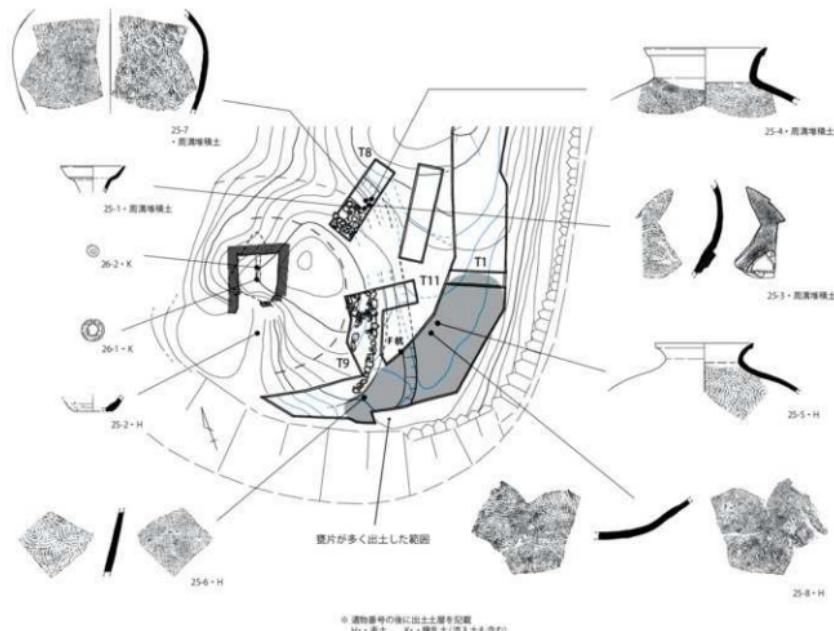
玄室のサブレンチで床面は確認されなかった。腐葉土の下には厚さ30cm程度の流入土が堆積し、その下から凸凹した岩盤を検出した。岩盤の状況からすると、この面が床面とは考えにくく、岩盤上に整地土等を施し床面としていたと思われる。岩盤は、奥壁側でほぼ垂直に近い角度で下降し、奥壁の大きさからすれば、深い掘り込みを設けて据えたものと考えられる。サブレンチの流入土から、金環1点と小玉1点が出土している。いずれも埋葬時に副葬されたと考えられる。

第4項 遺物出土状況（第24図）

遺物は、T8の周溝堆積土と南東側表土から多く出土している。鏡や甕片で、甕片は墳丘南東側からの出土が多い。



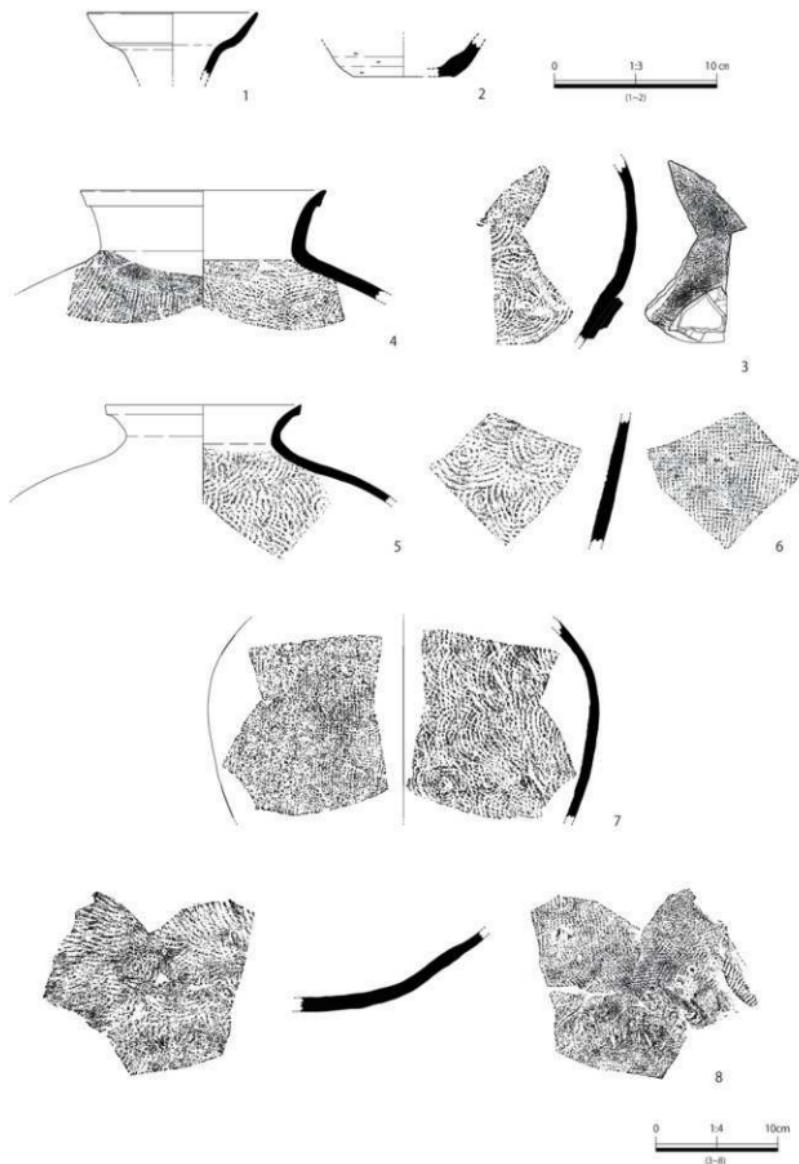
第23図 3号填石室実測図 (S=1:40)



第24図 3号墳遺物出土状況図 (平面:S=1:200, 遺物:縮尺不同)

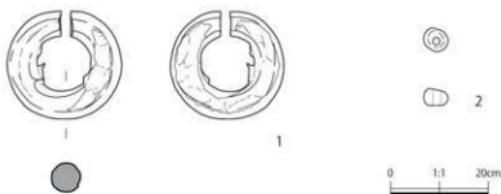
第5項 出土遺物 (第25・26図)

第25図は、3号墳から出土した須恵器である。25-1は縁の口縁部である。頭部に対して口縁部が開くもので、出雲5期である。25-2は縁の底部で、胸部下半にヘラ削りがみられる。平底面であることから、3期以降の所産としかいえない。25-3は、外面にカキ目、内面に当て具痕を施す破片で、横瓶の胴部片と思われる。外面に須恵器片が2点接着している。このうち1点は、口縁端部の内側にかえりをもつ蓋と考えられ、この蓋は出雲6b～d期頃と考えられることから、この横瓶はこの時期のものである。25-4、5は、口縁部の短い甕である。4は外面に叩き後カキ目を施す。内面には当て具痕をナデた痕跡がみられる。5は、外面に自然釉が掛かり、叩き痕は確認されないが、内面は4と同じくナデしている。25-6は、外面に格子状の叩き痕、内面に青海波文の当て具痕が残る甕片である。25-7は、甕の胴部である。外面には叩き痕とカキ目が認められ、自然釉が掛かる。内面は細かく、凹凸の著しい青海波文の当て具痕が残る。25-8は、甕の底部である。外側に叩きを施し、ナデしているところもみられる。内面には当て具痕が残る。25-4～7の甕片は、胎土や叩き痕、当て具痕の原体から、異なる個体の甕である。



第25図 3号墳出土遺物実測図① (S=1:3, 1:4)

26-1 は金環である。銅地で、鍍金が全体の半分程度残り、一部緑青が浮き出ている。断面は円形で中実、突合せ部の隙間は 2mm 程度である。大きさは外径 2.3cm、厚さ 0.6cm を測る。金環については、美保神社に「海崎歓蠶の岩屋出土」のものが保管され、海崎古墳群 3 号墳出土ではないかと考えられている。⁽¹⁰⁾ これは、外径 2.3cm、厚さ 0.75cm、断面は梢円形であり、今回出土のものとは厚さや断面が異なることから、対になるものではない。しかし、複数の耳環があることは通例であり、海崎 3 号墳出土を否定するものでもない。26-2 はガラス小玉である。径 5mm、厚 3mm、孔径 1mm を測り、濃い藍色を呈する。他に、玄室内の土層から鉄片が少量出土しており、何らかの金属製品が副葬されていたものと推測される。



第 26 図 3 号墳出土遺物実測図② (S=1:1)

第6項 時期

3 号墳の時期は、周溝出土の甕（第 25 図-1）から、出雲 5 期と考えられる。石室形態をみると、奥壁は大形の一枚石、側壁は基底部に大型の腰石を置き、その上に割石を数段やや持ち送りながら積んでいる。また、平面形は方形に近いプランである。調査例の少ない島根半島東部の横穴式石室にあって、このような石室の形態に年代観を与えることができることとなる。一方、墳丘周辺から出土した須恵器裏片に、内面の叩きをナデたものが一定量含まれることは注意される。

第4節 土坑と溝

1 号墳北東側には平坦面が確認され、その北東側に緩斜面が続いている。平坦面の地形をみると、隅丸方形状を呈し、その南西側は 1 号墳周溝に切られている。その平坦面のほぼ中央付近から 3 基の重複する土坑（SK01～03）を、緩斜面から溝（SD01）を検出している。これらの遺構はいずれも地山面から検出された。

第 27 図土層断面の 1、2 層は表土、3 層は堆積土である。4、5 層は 1 号墳周溝埋土、6 層は SD01 埋土である。土層断面 a-a' をみると、8 層の SK02 埋土を 7 層の SK01 が切っており、また、SK03 埋土 9～11 層を 7 層が切っていることから、3 基の土坑の新旧関係は、新しい順に SK01 ⇒ SK02 ⇒ SK03 となる。溝と土坑の新旧関係についてはわからなかった。これらの遺構から遺物は出土していないため、時期は不明である。

SK01（第27図）

規模は、南北 1.6m、東西 1.45m、深さ 0.36m を測る不整形な土坑である。

SK02（第27図）

SK02 の南西側に位置し、北東側は SK01 に切られている。規模は、現状で長さ 1.05m、幅 1.05m、深さ 0.38m、主軸方位は N-70°-E を測り、方形または長方形の土坑と思われる。

SK03（第27図）

SK03 は、1号墳北東側平坦面に設置した T4 トレンチの土層断面で確認した土坑である。土坑の南端は T4 トレンチやサブトレ 1 内で終わり、それより南側で検出していない。規模は、土層断面から幅 80cm、深さ 40cm 程度の土坑である。

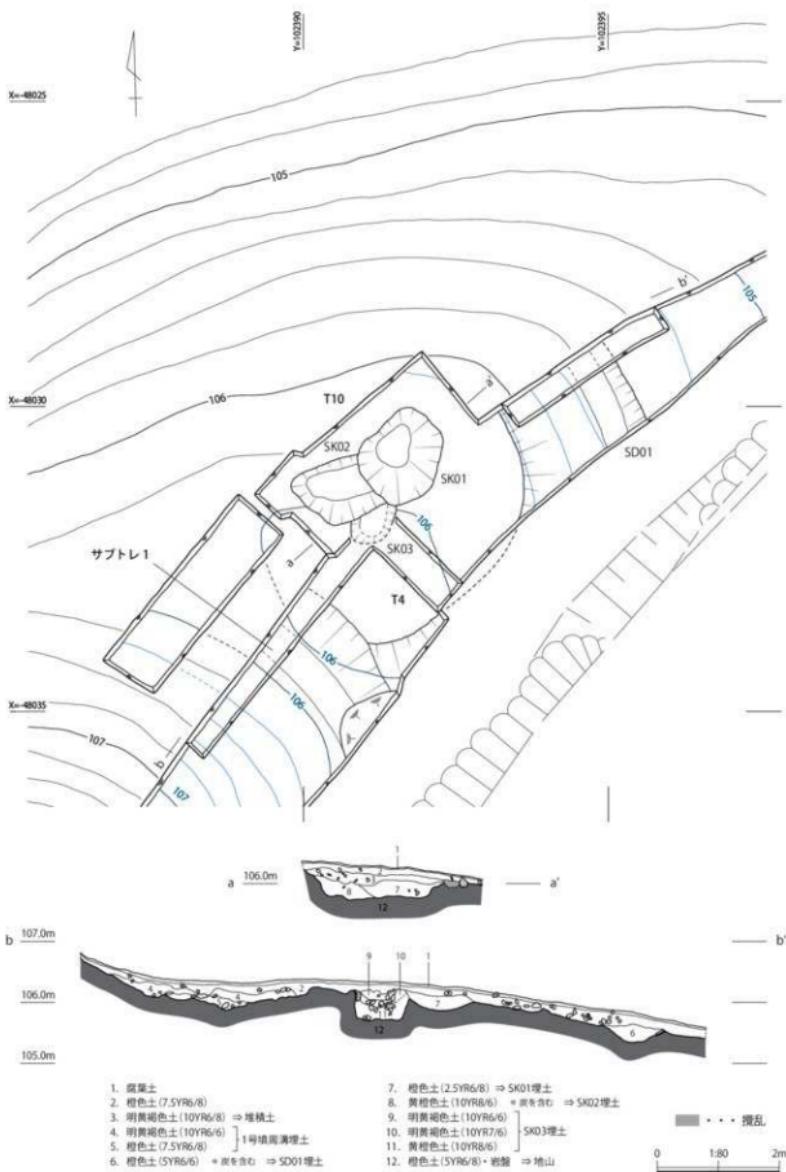
SD01（第27図）

SK01 の北東側で検出した遺構である。現況で長さ 1.5 m、幅 0.9 ~ 1.0m を測り、北西から南東方向にみられる。深さは最大で 60cm を測り、底面標高は南東が高く、北西が低い。

SD01 を積極的に評価すれば、SD01 と 1号墳区画溝間に小規模なマウンドがあつてよいと思われる。現況からすると、そのマウンドは 3 基の土坑を検出した平坦面であり、土坑のなかに主体部の可能性は考えられるが、出土遺物もないことから断定には至らない。

【註】

- 1986 年に刊行された『美保関町誌』の写真をみると、1号墳石室の天井石が確認される。これは近藤正氏によって撮影されたものである。また、図面は近藤正氏の記録をもとに修正されて記載され、天井石が 2 枚確認される。石室周辺に散在している石材のなかには近藤氏の記録にある天井石と同じものがみられる。
鳥根県立三島自然館サビメル「中村唯史氏の御教示による」
- 玄室比とは、玄室の長さを幅で割った値で、この値が高いほど狭長な石室である。
- 1号墳石室は、昭和 48 年の近藤正氏の調査時点に一度開削されているようである。かつて天井石が存在した時点の写真を見ると、現況の側壁上に天井石が架構されていたことがわかり、石室の高さは残存高とほぼ同じと考えられる。
- 米子市教育委員会・日下古墳群発掘調査班 1992 『日下古墳群発掘調査報告書』
日下古墳群 6・17 号墳で口縁が外反する环盃が出土している。
- 米子市教育委員会・石州府古墳群発掘調査団 1989 『石州府古墳群発掘調査報告書』
石州府 3・4・5・61 号墳などで口縁が外反する环盃が出土している。
- 林田好子・中尾篤志 2014 『九州型石鍬の集成と展望』『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第 4 号』
九州型石鍬は形態や繋用の溝、穿孔によって分類が行われている。今回出土した石鍬は、紡錘形で長軸方向に 1 条の溝がみられ、上記の文献のなかで II 類 A 類に分類される。この石鍬は、北部九州では弥生時代中期以降からみられるものである。
- 前掲註(2)に同じ
- 鳥根県立三島自然館サビメル「御津貝塚横穴群発掘調査報告書 I」
御津貝塚横穴群 1 号穴出土の高円(図 10-3、4)は、同大で、2 方透しであるが、1 方は台形状、もう 1 方は切込みの透しをもつ。透しに接して「×」印のヘラ記号があり、同品の可能性がある。であれば、ヘラ記号右側に隣接する透しは台形状のものである。
- 鳥根県立八雲立つ風土記の丘所長・松本岩雄氏の御教示による。鳥根県埋蔵文化財包蔵地調査補充カードに、「海崎歎詠の岩屋出土」の金環の写真、実測図が掲載されている。



第27図 調査区北東側平坦面実測図 (S=1:80)

第5章 総括

海崎古墳群は、前章で触れたように島根半島東部、美保湾に面した丘陵に位置している。3基の古墳は以前から周知されており、丘陵尾根上に2基の方墳と1基の円墳が所在する。今回の調査範囲は古墳の墳端部分であったが、調査によって新たな発見があり多くの成果を得ることができた。以下、調査成果をまとめ、総括とする。

第1節 遺構

第1項 群構成・墳丘

海崎古墳群は、丘陵尾根上に位置する10m程度の小規模な古墳群である。墳丘は丘陵尾根上に築造されている。

1号墳は11.0×9mの方墳で、墳丘高1.8～2.0m（うち盛土1.0～1.2m）である。墳丘のほぼ中央に竪穴系横口式石室が構築されている。墳丘は、地山面を掘り込んで石室基底部を造り、その後石室の構築をしながら盛土を施し墳丘を築造している。

2号墳は、13.5×10m、高さ1.0～1.4mの方墳である。中心主体は検出していない。墳頂平坦面の端部で小形の箱式石棺を検出している。

3号墳は、直径10.2m以上の外護列石を有する円墳である。高さは、石室床面から現状2.8mである。横穴式石室が南西側に開口し、墓道は南西側道路法面で確認している。

周辺の古墳をみると、海崎古墳群の南西側丘陵に天神社裏山古墳群が所在する（第30図参照）。この古墳群は、4基の石室と直径10m以下の小規模な円墳13基からなる古墳群である。また、石室は昭和37年に近藤正氏により一部が調査され、2号石室と3号石室は「石棺系竪穴式石室」とされている。2号石室は、長さ1.55m、幅0.7mを測り、側壁で奥壁を挟むものである。遺物は高杯、杯蓋、金環、玉類で、出雲2～4期（山陰須恵器編年Ⅲ期）と思われる。3号石室は奥壁と側壁の基底部を残すのみで、規模はおおよそ長さ1.8m、幅0.5mである。

海崎古墳群と天神社裏山古墳群をみると、市道により尾根が削られているものの、同じ北側から派生する丘陵に位置している。天神社裏山古墳群が所在する尾根北側の最高所には、現地踏査により20m以上の方墳が新たに確認され、海崎古墳群より高い位置にある。海崎古墳群と天神社裏山古墳群は、この方墳の北東側と南西側に所在し、一連の古墳群の可能性がある。位置や規模からすると、この古墳がふたつの古墳群の盟主墳となる可能性がある。そうすると、これらの古墳群は、海崎支群、天神社裏山支群として把えられる。

第2項 埋葬施設（第28図）

1号墳と3号墳の石室は既に開口し、1号墳は竪穴系横口式石室、3号墳は横穴式石室をもつものである。

1号墳の石室は、

- ①奥壁に1枚石を立て、奥壁を挟むように側壁の基底部に薄い板石の腰石を据える。
 - ②腰石の上に板石を小口積みする。積石の横目地は通っている。
 - ③玄室天井石は3枚か。
 - ④玄室は狭長な縦長長方形で、玄室比は1.9である。
 - ⑤板石による閉塞を行う。
 - ⑥羨道は玄室の右側に取り付く。
- となる。

第28図に補足として、1号墳石棺の復元図を載せている。天井石は『町誌』より転載し、加筆修正したものである。玄室の規模は現況と同程度で、天井には3枚程度の石が架構され、側壁より奥壁が低いことから奥壁上にも数段石が積まれていたと推測される。側壁は横目地が通るものであったろう。羨道は約0.7mと狭い。

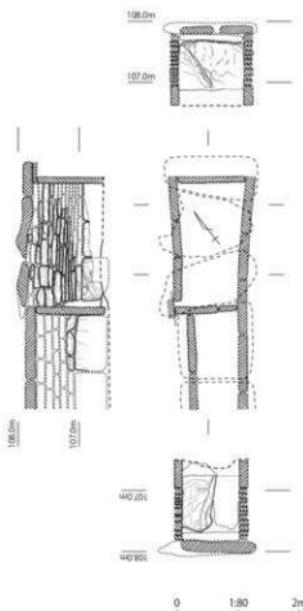
2号墳の中心主体は検出していないが、盛土の厚い墳丘ではないこと、西側墳丘面に板石が点在していること、板石を使いながらも墳丘の高さが低いことから、箱式石棺のような主体部が想定される。

次に3号墳の横穴式石室は、

- ①奥壁は一枚石で、両側壁で奥壁を挟む。
- ②側壁は基底部に腰石を据え、その上に割石をやや持ち送りながら積む。積石の横目地は通っている。
- ③天井石は1枚。
- ④平面形は正方形に近く、玄室比は1.2である。
- ⑤玄門部は片袖で、袖石は右側壁に組み込まれず自立する形で立てられている。

1、3号墳石室の形態は異なり、平面形や大きさ、側壁に積まれた石に違いがみられる。一方、奥壁に一枚の石を据えることや側壁の構造は同じといえる。

ここで、同じ美保湾に面し、海崎古墳群の西3.6kmに位置する福浦法田岬2号墳の横穴式石室に触れる。福浦法田岬2号墳は、丘陵の緩斜面に造られた10m前後の楕円形の円墳である。主体部は両袖の横穴式石室で、玄室、羨道の天井石は失われていた。玄室は、奥行2.0m、幅は奥壁側で1.38m、玄門側で1.17mを測り、平面形は主軸方向に長い縦長の長方形で、玄室比は1.43である。奥壁を両側壁で挟むもので、側壁の腰石の上に割石を積んでいたと推測されている。奥壁には大型の1枚石が使用されている。奥壁を側壁で挟むこと、基部に大型の石を据え上部に割石を小口積みにすること、奥壁に



* 天井石は、「美保便町誌 下巻」の(図 1-34 海崎1号墳石室実測図)より転載し、加筆修正して掲載した。

第28図 1号墳石室復元図 (S=1:80)

1号石を使用することは海崎3号墳石室と同じである。このような石室は、鳥取県の伯耆西部に多くみられる形態であり、角田氏により論考されている。⁽⁴⁾

第2節 出土遺物（表1）

1号墳から出土した須恵器は、壺蓋、高壺、直口壺、甌、甕片などで、出雲2期から出雲6b・c期までと、出雲8期のものがある。他に、石錘、小玉、金属製品が出土している。須恵器のなかには、出雲部の形とは異なり、伯耆西部の遺物と類似したものが出土している。口縁が外反する壺蓋や脚端部が面をもたない高壺で、伯耆西部の日下古墳群や石州府古墳群から類似品が出土している。次に、金属製品は、刀子、吊り金具、針状鉄製品、銛留の鉄片である。吊り金具は大刀が副葬されていたことを示す。また、銛留と思われる鉄片は、短甲、冑、馬具などが想定される。こうした遺物の出土例を見ると、銛留短甲は本古墳の東側1.2kmに位置する弥陀谷古墳から出土している。県内の出土例は少なく、短甲では8例がある（表1参照）。そのなかで銛留短甲は4例確認され、そのうちの1例が弥陀谷古墳である。弥陀谷古墳の詳細は不明だが、遺物のなかに5世紀中頃の特徴をもつ鉄製三角板銛留短甲が出土しており、時期はやや遡るが同様な副葬品をもつこととなり注目される。他に、北部九州型の石錘が出土していることは、興味深い。

2号墳から出土した遺物は少なく、須恵器の蓋壺、甌、高壺、土師器片である。出雲3期、出雲5期、出雲6b・c期の3時期の遺物がみられる。出土した須恵器の時期から古墳の築造は出雲3期と捉えられる。

3号墳から出土した遺物は、甌、甕片、金環、小玉である。甕片が大半を占め、叩き具や当て具の原体の違いから複数の甕が確認された。

表1 島根県内の短甲出土例

古墳名	市町村	短甲の型式	古墳の形態・規模	埋葬施設	古墳の時期
中村B1号墳	石見町	方形板革縫短甲	前方後方墳・全長22m	箱式石棺	前期
丹花庵古墳	松江市	三角板革縫短甲	方墳・一边49m	長持形石棺	中期後半（～TK208）
大塚荒神古墳	松江市	革縫短甲	方墳・一边14m	割竹形石棺	中期
玉造篠山古墳	玉湯町	横削板銛留短甲	円墳・径16m	舟形石棺	中期後葉
里壳塚古墳	安来市	革縫短甲（三角板か）	前方後円墳・全長41.8m	舟型石棺	中期中葉
月坂放レ山5号墳	安来市	横削板銛留短甲	方墳・一边14m	木棺	中期後半
弥陀谷古墳	美保関町	三角板銛留短甲	消滅により不明		
塙山古墳	松江市	三角板銛留短甲（横削板併用か）	方墳・一边33m	磯床・舟形木棺か	中期後半（TK208）

「田中谷道路・塙山古墳・下がり松道路・角谷道路」発掘調査報告書から転載、加筆修正

第3節 時期（表2）

表2は、各古墳の時期を示したものである。

1号墳からは、出雲2期から5期、出雲6b・c期、出雲8期の遺物が出土している。出雲2期の

遺物が1号墳築造の時期と捉えられる。出雲5期までの遺物は継続的にみられることから、狭い石室ながらも複数回の追葬が行われたと考えられる。出雲6b・c期、出雲8期の遺物は、祭祀に伴う遺物と思われる。

2号墳からは、出雲3期、出雲5期、出雲6b・c期の遺物が出土している。墳丘から出雲3期の須恵器が出土し、この時期に築造されたと考えられる。

3号墳は、出土須恵器の時期から出雲5期の古墳と考えられ、石室構築も同時期に行われたと考えられる。土層断面から、複数回の追葬が想定される。

出雲2期に堅穴式横口式石室をもつ1号墳が造られ、その後、3期に2号墳が、5期に横穴式石室をもつ3号墳が築造され、それぞれの古墳ごとに複数回の追葬が行われていたことが明らかになった。

表2 海崎古墳群の時期

年代(c)	6 c				7 c			8 c		
	出雲編年	2期	3期	4期	5期	6期			7期	8期
a			b・c			d				
1号墳	●									
2号墳		●	-----	-----	-----	-----	-----	-----		
3号墳				●	-----					

● ……初葬・築造 —— ……追葬 ----- ……追葬(推定) — ……祭祀

第4節 海崎3号墳の墳丘築造過程の検討（第29図）

今回の調査では、3号墳築造過程の一端を知ることができた。ここでは、3号墳の築造過程について検討してみたい。第29図は3号墳墳丘の模式図である。Aは墳丘南北断面にT8土層断面を、Bは墳丘東西断面にT11土層断面を投影した図である。

①地山の掘削・平坦面の造成

3号墳周辺のトレチ土層断面（第19図：道路法面上層、第22図：T8）をみると、岩盤は北東から南西側に下降している。その斜面を掘り下げ、石室設置の岩盤平坦面を造る。岩盤のない南西側については、盛土を施す。

②奥壁・側壁の構築

奥壁を据え、これを挟むように側壁腰石を設置し、腰石上に奥壁と高さが揃うまで石材を積み上げ、地山と側壁間にT8-11層を積み上げて、東側の岩盤層面と面一な作業面を作る。また、西側にも天井石架構作業において側壁が倒れない程度の盛土が施されていたことが考えられる。袖石はこの時点では樹立されていたものと思われる。櫛石ないし羨道天井石の有無は不明だが、あったとすれば、玄室天井石架構前に設置されたものと考えられる。

③天井石の架構

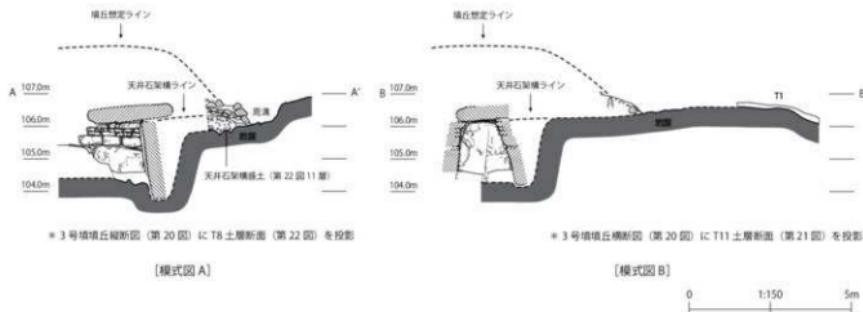
Bをみると、岩盤と玄室側壁の上端とのレベルがほぼ同じであり、堅固な岩盤がある東側から天井

石を架構することを考慮していたものと思われる。

④ 墳丘の完成

盛土を施しながら外護列石を巡らせ、墳丘を完成させる。

以上のような過程で墳丘を築造したと推察される。但し、3号墳をみると、1、2号墳と同じ尾根筋に位置せず、南西側に盛土をして西寄りの山寄せの古墳のように造られている。これは、天井石の架構工程からの選択であった可能性が高い。同様の天井石の架構方法は、やはり山寄せの立地を取り、高所側の岩盤面を利用したと考えられる福浦法田岬2号墳でも認められており、巨大な石室墳は別として、小規模な横穴式石室の構築方法として、ある程度通有の方法であった可能性がある。



第29図 3号墳墳丘模式図 (S=1:150)

第5節 島根半島東部における海崎古墳群 (第30図・表3・表4・表5)

ここでは、島根半島東部の後期古墳について触れてみたい。なお、ここでの島根半島東部とは、便宜上、島根半島東部の広い範囲を占める美保関町域を東部として話をする。

第2章で述べたように、美保関町は島根半島東部に位置し、北岸は日本海、南岸は中海から境水道、そして美保湾に面している。平坦地は少なく、民家はその平坦地に集中している地域である。現在確認されている古墳は地域ごとに多く認められ、『町誌』では古墳時代後期における古墳は34基存在するとしている。但し、本格的な調査が行われている古墳は少なく、露出している石室や、墳丘から出土している遺物からその様相を窺い知ることしかできない。

当該地域における後期古墳は、大きさが10m前後の小規模な円墳や方墳で、丘陵尾根上や斜面に築造されている。後期の古墳を表3に、そのなかの竪穴系横口式石室、石棺系竪穴式石室を表4に、横穴式石室を表5に示している。

海崎古墳群では、出雲2期に導入期の石室として1号墳で竪穴系横口式石室が、出雲5期に3号墳で横穴式石室が造られており、時期的な変遷が認められる。

次に、横穴式石室をみてみたい。まず、福浦法田岬2号墳報告書で検討されたように、美保関町域の横穴式石室は縦長の平面プランを有し、同じ縦長プランを呈する出雲西部の横穴式石室とは袖石⁽⁵⁾が石室側壁から独立していることで、一線を画している。ここで、海崎3号墳と福浦法田岬2号墳(以

表3 美保関町における古墳時代後半期古墳（美保関町誌より作製）

No.	名 称	所在地	形態	規模 (m) 逆×傍	高	内部構造 (玄室：奥行×幅 m)	出土遺物	備 考
1	海崎1号墳	海崎	方	11.0 × 9.0	2.0	横穴式機口式石室	須恵器、石錐、刀子、小玉	6世紀初頭
	海崎2号墳	海崎	方	13.5 × 10	1.4	-	須恵器	6世紀中頃か
	海崎3号墳	海崎	円	10.2	2.0	横穴式石室	須恵器、金環、小玉	6世紀末～7世紀初頭
2	天神社裏1号石室	海崎	-	-	-	-	-	-
	天神社裏2号石室	海崎	-	-	-	石棺系壁穴式石室	須恵器、延石、金環	今山陵須恵器編年Ⅲ期
	天神社裏3号石室	海崎	-	-	-	石棺系壁穴式石室	須恵器、勾玉、刀子	-
	天神社裏4号石室	海崎	-	-	-	-	-	-
	天神社裏1号墳	海崎	円	7.0	1.0	-	-	-
	天神社裏2号墳	海崎	円	8.7 × 7.5	1.2	-	-	-
	天神社裏3号墳	海崎	円	8.0 × 10	1.5	-	-	-
	天神社裏4号墳	海崎	円	11.0	1.8	-	-	-
	天神社裏5号墳	海崎	円	8.8 × 10	1.5	-	-	-
	天神社裏6号墳	海崎	円	11.5	1.9	-	-	-
	天神社裏7号墳	海崎	円	7.3 × 8.0	1.7	-	-	-
	天神社裏8号墳	海崎	円	6.0 × 6.3	1.0	-	-	-
	天神社裏9号墳	海崎	円	9.0	1.3	-	-	-
3	天神社裏10号墳	海崎	円	7.5 × 6.9	1.2	-	-	-
	天神社裏11号墳	海崎	円	6.8 × 7.5	0.8	-	-	-
	天神社裏12号墳	海崎	円	12 × 10	0.7	-	-	-
	天神社裏13号墳	海崎	円	5.0 × 6.0	0.6	-	-	-
	福浦法田跡2号墳	福浦	円	9.3 以上	-	横穴式石室	須恵器、主頭大刀、玉類	6世紀末～7世紀初頭
	4客入石古墳	美保關	円	9.5 × 10	1.9	横穴式石室	-	-
	5宝寿寺山古墳	美保關	円	8.0	1.0	横穴式石室	-	-
	6山籠古墳	美保關	-	-	-	横穴式石室？	須恵器蓋环	今山陵須恵器編年Ⅲ期
	7前屋古墳	鰐尾	-	-	-	横穴式石室	須恵器	-
8	春加谷1号墳	雪津・春加谷	-	-	-	横穴式石室	-	-
	春加谷2号墳	雪津・春加谷	-	-	-	横穴式石室	-	-
9	長浜古道古墳	吉津・長浜道	円	10.0	3.0	横穴式石室・両袖式	-	-
	10男鹿古墳	福浦・男鹿	-	-	-	横穴式石室・片袖式	-	-
11	天神社古墳	森山・日向浦	-	-	-	横穴式石室	-	-
	12郷の坪古墳	森山・郷の坪	-	-	-	横穴式石室	須恵器	-
13	西ノ谷1号墳	森山・西ノ谷	-	-	-	横穴式石室？	-	-
	西ノ谷2号墳	森山・西ノ谷	円	6.5 × 5.3	0.6	-	-	-
	西ノ谷3号墳	森山・西ノ谷	円	5.5 × 6.0	0.7	-	蓋穴	-
	西ノ谷4号墳	森山・西ノ谷	円	6.0 × 5.5	0.6	-	-	-
14	大矢尾1号墳	七顛・向浜	-	-	-	横穴式石室	-	-
	大矢尾2号墳	七顛・向浜	-	-	-	横穴式石室	-	-
15	麓土古墳	七顛・麓土	-	-	-	横穴式石室	-	-
	16早稻田古墳	七顛・浪那	-	-	-	横穴式石室	勾玉	-
17	雛子1号墳	七顛・雛子	-	-	-	横穴式石室・両袖式	-	-
	雛子2号墳	七顛・雛子	-	-	-	横穴式石室	須恵器	-
	雛子3号墳	七顛・雛子	-	-	-	横穴式石室？	-	-
18	向塙1号墳	片江・向塙	-	-	-	-	須恵器	-
	向塙2号墳	片江・向塙	-	-	-	横穴式石室？	-	-
	向塙3号墳	片江・向塙	-	-	-	-	須恵器	-
	向塙4号墳	片江・向塙	-	-	-	-	-	-
	向塙5号墳	片江・向塙	-	-	-	-	-	-
19	向塙6号墳	片江・向塙	-	-	-	-	-	-
	小山古墳	片江・向塙	-	-	-	-	須恵器？	-
20	岩山1号墳	千鶴・岩山	円	6.3 × 7.5	1.9	横穴式石室・片袖式か？	-	-
	岩山2号墳	千鶴・岩山	円	7.8 × 7.2	2.1	横穴式石室・片袖式	-	-
21	岩山3号墳	千鶴・岩山	円	8.8 × 8.9	2.7	横穴式石室・両袖式	玄室、奥壁・側壁は1枚石	-
	岩山4号墳	千鶴・岩山	円	6.8 × 7.8	2.3	横穴式石室	玄室、奥壁・側壁は1枚石	-
	岩山5号墳	千鶴・岩山	円	7.6	2.4	横穴式石室	-	-
	岩山6号墳	千鶴・岩山	円	7.8 × 9.6	2.3	横穴式石室	-	-
	岩山7号墳	千鶴・岩山	円	7.7 × 7.8	1.6	横穴式石室	-	-
22 鮎蛇谷古墳 美保關								
銘製三角板帆留組甲								

◎ 山本清「山陰の須恵器」『鳥取大学十周年記念論文集』

表4 美保関町における竪穴系横口式石室・石棺系竪穴式石室の構造

	古墳	石室形態	①玄門形態	②袖石と側石	③玄室天井石	④側石の石積み段数	⑤奥壁石積み	⑥奥壁と側壁	⑦玄室規模 (奥行×幅:m)	⑧玄室長／ 奥壁幅	
1	海崎1号墳	竪穴系横口式石室	Ⅲ?			2枚以上	a 11段以上	1段以上	a	2.0 × 1.05	1.9
2	天神社裏山2号石室	石棺系竪穴式石室			-	a 4～5段?	3段?	a	1.55 × 0.7	2.2	
	天神社裏山3号石室	石棺系竪穴式石室			3枚?	a 1段以上	1段以上	a	1.8以上 × 0.5	3.6以上	

表5 美保関町における横穴式石室の構造

	古墳	①玄門形態	②袖石と側石	③玄室天井石	④側石の石積み段数	⑤奥壁石積み	⑥奥壁と側壁	⑦玄室規模 (奥行×幅:m)	⑧玄室長／ 奥壁幅	
1	海崎3号墳	II			1枚	a 5段	1段	a	1.95 × 1.7	1.2
3	福浦法田跡2号墳	I	イ a			a 4～5段	1段?	a	2.0 × 1.4	1.43
4	客人社古墳					a 2～3段?	1段?		1.1以上 × 1.0	1.1以上
5	宝寿寺山古墳			1枚?	a 3～4段?	1段?	a	1.0以上 × 1.2	0.83以上	
8	春加谷1号墳					a 4段	1段	a	2.0以上 × 1.5	1.3以上
	春加谷2号墳					a?				
9	長浜古墳	I	イ a	2枚?	a 3段	1段	a	2.4 × 1.3	1.8	
10	男鹿古墳	II				a 4～5段	1段	a	2.1 × 1.4	1.5
13	西ノ谷1号墳					a?			? × 1.4?	
14	大矢尾1号墳		イ?			a?				
15	龍土古墳		イ a			a 3～4段?			2.0? × ?	
17	猪子1号墳	I?	イ a	1枚	a 3～4段	1段	a	2.2 × 1.0以上	2.2以下	
	猪子2号墳					a?			? × 1.3?	
20	岩山1号墳	II?	イ a?			a 2～3段?	1段	a	? × 1.5	
	岩山2号墳	II?			1枚	a 5～6段	1段	a	1.65 × 1.3	1.3
	岩山3号墳	I	イ a	1枚		a 1～2段	1段	a	1.5 × 2.1	0.7
	岩山4号墳	I	イ a			b	1段	a	1.6 × 1.6	1.0

「福浦法田跡2号墳」発掘調査報告書から転載、加筆

① I : 両袖式石室 II : 片袖式石室 III : 無袖式石室

② イ : 袖石は立柱状に1石でたつ。

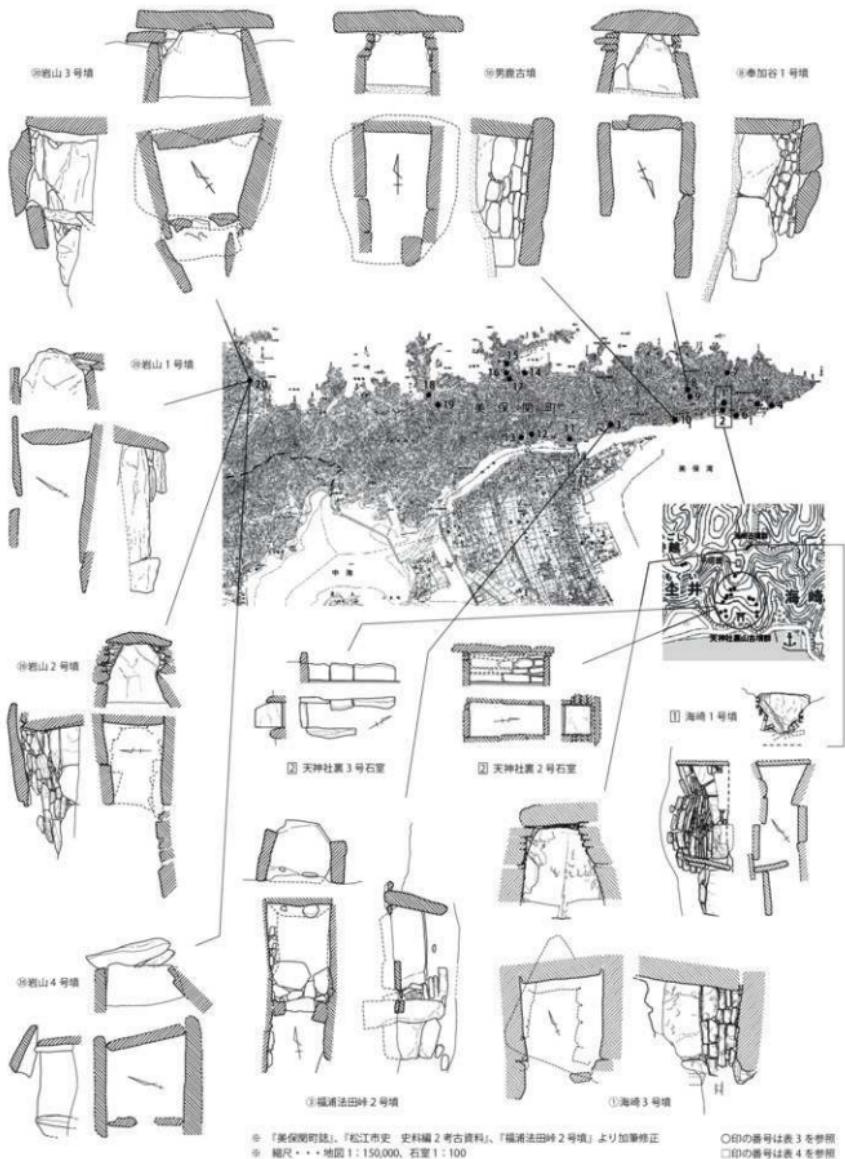
a : 袖石が独立し、側石の内側にたつ。

b : 袖石は側石に挟み込まれている。

④ a : 基部に大形の板石を盛り、上部に割石を小口積みにするもの。

b : 1枚石のもの。

⑥ a : 奥側壁で奥壁を挟むもの。



第30図 島根半島東部の竪穴系横口式石室・石棺系竪穴式石室・横穴式石室

下、法田岬2号墳)をみると、奥壁や側壁の構造は同じである。しかし、法田岬2号墳が両袖石を有するのに対し、海崎3号墳は片袖である。石室は、海崎3号墳石室が出雲4期築造の法田岬2号墳の石室よりも大形の石室を築造していることは言える。また、法田岬2号墳の石室は玄室床石を有する点も注意される。海崎3号墳石室に床石が認められないことを考慮すれば、出雲4期から5期にかけて、袖石や床石が省略される変遷が追えるかもしれない。

片袖の横穴式石室は、他に本遺跡の南西側、美保湾に面した男鹿古墳(第30図-⑩)がある。奥壁、側壁の構造、側壁の積石に横目地が通るところは海崎3号墳とよく似ている。しかし、床面形態や面積をみると、正方形に近い海崎3号墳石室と異なり縱長であり、法田岬2号墳とほぼ同じである。男鹿古墳の石室は、玄室床石の有無は不明だが、片袖であることを除けば法田岬2号墳の石室に近く、法田岬2号墳石室と海崎3号墳石室両方の要素をもち、両者の中間に位置づけられるのではなかろうか。

他に、本古墳群の北西側に奉加谷1号墳(第30図-⑧)がある。袖石は無いようで、床石の有無は不明であるが、玄室の規模は海崎3号墳石室とほぼ同大である。奥壁、天井石の数は異なるものの、構造は海崎3号墳石室や男鹿古墳とよく似る。

次に、島根半島東部の日本海側に所在し、本書で示した地域では最西端に位置する岩山古墳群(第30図-⑩)について触れる。本古墳群は、横穴式石室をもつ7基の古墳からなる。岩山1、2号墳の玄室構造は、海崎3号墳や法田岬2号墳と同じように奥壁に1枚石を立て、側壁は腰石の上に板石を積み上げるものであるが、袖石は確認されない。3号墳、4号墳は各壁1枚石を指向し、袖石をもって正方形プランに近づき、出雲東部の石棺式石室の影響が窺われながらも、奥壁を両側壁で挟むなど、石棺式石室の原則からは逸脱する。岩山古墳群は美保閑町千酌に所在し、奈良時代には隱岐国への航路の発出点である千酌駅が設けられたところである。律令期には重要港となる港湾を一望のもとに見下ろす特徴的な立地の古墳群である。出雲国と隱岐国の結節点ともいえる場所で、この意味で東部出雲勢力にとっても枢要な位置に当たり、東部出雲的な石室の出現経緯があるようみえる。一方、東部出雲的な石室の3号墳は平面形が羽子板プランであって、伯耆方面との関連を窺わせるなど複雑な様相を示してもいる。

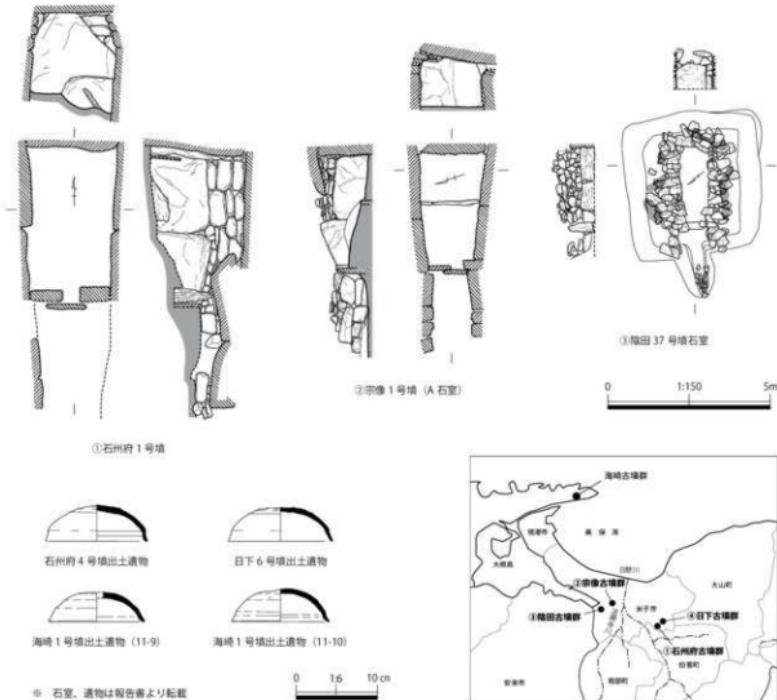
第6節 海崎古墳群の系譜(第31図)

島根半島東部では、出雲2期に竪穴系横口式石室が導入され、その後、出雲4期以降に法田岬2号墳や海崎3号墳でみられるような横穴式石室が造られている。

竪穴系横口式石室は、周辺地域では鳥取県の伯耆地方で多くみられる石室である。伯耆西部、特に日野川下流域、法勝寺川流域に目を向けると、5世紀後半から6世紀前半にかけて北部九州で盛行した竪穴系横口式石室の系譜を引く石室が存在している。なかでも陰田古墳群の37号墳石室(第31図-③)は、海崎1号墳石室と同時期の石室と考えられる。陰田37号墳では、側壁腰石上に積まれる石材は塊石状のものが使われ、九州(福岡県)の汐井掛17号墳⁽¹⁾など、故地の石室に近いが、海崎1号墳では腰石上には板石を小口積みにしており、これは別系統の石室の石材使用法を取り入れてい

るものと考えられ、系統については複雑な様相を呈する。

次に、海崎3号墳と同時期の横穴式石室をみると、出雲東部では石棺式石室が展開し、出雲西部では切石を使用した石室が造られている。海崎3号墳や法田岬2号墳と同様な石室は、伯耆地域に類例が求められる石室である。伯耆西部の横穴式石室は、宗像1号墳石室（第31図-②）を祖形としており、この地域の横穴式石室については角田氏により論考され、5類（A～E類）に分類されている。このなかのA類は基部に大型石材を用いて上部に割石を小口積みにし、奥壁は1枚石で構成され、玄門には2枚の板石を立てて両袖とするものである。このような石室は、日野川下流域、法勝寺川流域に広く分布している。海崎3号墳石室や法田岬2号墳石室と同時期の横穴式石室では、石州府古墳群の1号墳石室（第31図-①）が挙げられる。石州府1号墳石室の側壁、奥壁構造は、海崎3号墳石室や法田岬2号墳石室と同様であり、玄門は法田岬2号墳石室と同じく袖石が側壁に組み込まれていない。島根半島東部の横穴式石室は、概ね角田氏のA類に属していると思われ、豊穴系横口式石室も合わせ考えると、伯耆西部と軌を一にして変遷していることになる。しかし、玄門



第31図 伯耆西部の豊穴系横口式石室・横穴式石室・遺物

や石室形態に違いがみられるものもあり、特異な小地域性があるのかもしれない。

伯耆西部との関わりは、本古墳の遺物のなかに伯耆西部の石州府古墳や日下古墳群と類似する杯蓋、有蓋高环が散見されることからも理解される。

島根半島東部は、伯耆西部とは美保湾を隔てて対岸に位置し、海上交通での往来は容易であったと思われる。石室や遺物をみると、伯耆地方、特に西部との関わりが窺われるが、なかには岩山3号墳のように出雲東部の影響を受けたと思われるものもあり、島根半島東部の後期古墳の様相解明にはさらなる類例の蓄積を待たねばならない。

第7節 結語

以上、海崎古墳群の調査成果と周辺地域の関わりについて示した。

本古墳群は、出雲2期の古墳時代後期（6世紀初め）に築造が開始され、祭祀は1号墳で8期（7世紀末から8世紀初め）に行われたと考えられた。石室は、伯耆西部の影響を受け、出土遺物でもそのことに触れることができた。また、島根半島東部の他の古墳でも同様な状況が窺われ、伯耆西部との交流を見出すことができた。

次に、出雲東部や西部の石室をみると、出雲東部では、出雲2期に北部九州系譜の林43号墳や畿内系譜の薄井原古墳などの横穴式石室が造られる。出雲3期には肥後地方に系譜をもつ石棺式石室が出現し、その後定型化していく。一方、出雲西部では、出雲3期に九州型の両袖式の横穴式石室をもつ大念寺古墳⁽¹¹⁾が造られ、それを祖形として展開していく。出雲東部や西部で、同時期頃に北部九州系譜の石室を導入している。しかし、島根半島東部では別の系譜を引く石室を伯耆西部から導入し、展開したと考えられ、出雲東部や西部とは違う小地域性を想定させる。また、島根半島東部での横穴式石室が群集する状況は、出雲東部のなかでも非常に特異な地域といえる。そのように考えると、当地域における首長権がどのような構造であり、隣接する出雲東部、伯耆西部とどういった関係を持っていたのかなど、課題が存在することを改めて指摘しておきたい。

今回の調査では、海崎古墳群の様相を明らかにできた。調査例の少ない当該地域において本遺跡や法田峠2号墳の調査は貴重であり、その上で、島根半島東部においてひとつの小地域群が存在した可能性を示したこととは、後期古墳群研究の大きな成果と言える。今後の調査事例の積み重ねにより、当地域の様相が解明されることを期待したい。

【註】

1. 『美保関町誌』では、海崎 1 号埴石室と天神社裏山古墳群 2・3 号石室は同様な石棺系竪穴式石室としている。天神社裏山古墳群 2・3 号石室が竪穴系横口式石室の可能性はあるが、現況では明言できないことから、『町誌』どおり石棺系竪穴式石室と記載する。
2. 山本清 1960 「山陰の須恵器」『島根大学十周年記念論文集』人文科学編 島根大学
3. 島根県松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財團 2018 『福浦法田峠 2 号墳』
4. 角田徳幸 1985 「法勝寺川流域及び日野川下流域における横穴式石室とその系譜」『島根考古学会誌』第 2 集 島根考古学会
5. 美保関町誌編さん委員会 1986 『美保関町誌』
弥陀谷古墳は、美保関町大字美保関の龍海山仏谷寺の奥にあったとされるが、消滅しており墳形、内部構造は不明である。仏谷寺にはこの古墳から出土したと伝えられる短甲の他、土器と土製支脚が保管されている。
6. 福浦法田峠 2 号墳の玄門部は両袖式であり、立柱状の袖石が側壁に組み込まれず、両側壁に接している。
7. 建設省中国地方建設局倉吉工事事務所・米子市教育委員会 1984 『陰田』
陰田 37 号墳は、全長 25.9m の前方後円墳である。石室は竪穴系横口式石室で、出土遺物から TK10 並行期と考えられている。
8. 浦原宏行 1983 「竪穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』古墳文化研究会
浦原氏は、竪穴系横口式石室を 2 類 8 型式に分類している。陰田 37 号墳と同様な石室は、そのなかの II-d 型式であり、福岡県鞍手郡に所在する沙井掛 17 号墳石室を標識としている。
9. 註 4 に同じ
宗像 1 号墳は、全長 37m の前方後円墳である。後円部に 2 基の横穴式石室がある。石室 A の玄室は平面形「羽子板形プラン」を呈し、出土遺物から TK43 並行期と考えられている。
10. 松江市市史編纂委員会「林古墳群」『松江市史 史料編 2 考古資料』2012
11. 島根県教育委員会「薄井原古墳調査報告書」1991
12. 出雲市教育委員会「史跡今市大念寺古墳保存修理工事報告書」1984

土 器

遺物番号	出土位置	出土土層	種類	形質	法寸 (cm)			測量・手法の特徴・文様	色調	備考
					口径	底径	高さ			
11.1	1号墳 T6	褐色表面	縦柄鉢	平底	13.25	—	3.8	内・外: 黄褐色	内・外: 黄褐色	直筒
11.2	1号墳 北側側面	褐色表面	縦柄鉢	平底	13.45	—	4.7	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.3	1号墳 T6	褐褐色	縦柄鉢	平底	12.26	—	3.7	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.4	1号墳 T6, T2	褐褐色	縦柄鉢	平底	13.45	—	2.75	内・外: 黄褐色	内・外: 黄褐色	直筒
11.5	1号墳 T6	褐色土	縦柄鉢	平底	13.45	—	3.8	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.6	1号墳 T6	褐褐色	縦柄鉢	平底	12.08	—	3.6	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.7	1号墳 T6, T12	褐褐色から 20cm	縦柄鉢	直底	7.35	—	3.8	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.8	1号墳 T5	褐褐色	縦柄鉢	平底	12.27	—	3.65	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.9	1号墳 T6	褐褐色	縦柄鉢	平底	11.55	—	3.8	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.10	1号墳 T6	褐色土(下)	縦柄鉢	平底	12.0	—	4.0	内・外: 黄褐色、縫合ナメ、縫合部ヘラキ	内・外: 黄褐色	直筒
11.11	1号墳 T6	褐褐色	縦柄鉢	平底	8.0	—	3.7	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.12	1号墳 T6	褐褐色	縦柄鉢	平底	—	—	3.7	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.13	1号墳 T6	表土	縦柄鉢	平底	17.35	—	2.7	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.14	1号墳 T6	褐褐色化土	縦柄鉢	平底	9.0	—	3.7	内・外: 黄褐色、縫合ナメ、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.15	1号墳 側面	褐色表面	縦柄鉢	平底	—	—	3.4	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.16	1号墳 T6, T12	褐褐色化土	縦柄鉢	平底	11.22	—	4.7	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.17	1号墳 T6	褐色土	縦柄鉢	平底	—	—	3.8	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.18	1号墳 T6	褐色土(下)	縦柄鉢	平底	10.4	—	4.4	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.19	1号墳 T6	褐色真土	縦柄鉢	平底	11.05	—	3.9	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.20	1号墳 T6(上)	褐褐色	縦柄鉢	平底	—	—	3.8	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.21	1号墳 T3 内	表土	縦柄鉢	平底	11.0	—	3.9	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.22	1号墳 T6	褐褐色化土	縦柄鉢	平底	9.0	—	4.1	内・外: 黄褐色、縫合ナメ、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
11.23	1号墳 T6	褐褐色	縦柄鉢	底付付	—	10.2	1.6	内・外: 黄褐色	内・外: 黄褐色	直筒
12.1	1号墳 T6	褐色土	縦柄鉢	底付	—	—	4.0	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.2	1号墳 T6	表土	縦柄鉢	底付	—	—	4.5	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.3	1号墳 T6	褐色土	縦柄鉢	底付	8.1	7.0	9.25	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.4	1号墳 側面	褐色表面	縦柄鉢	底付	—	—	4.5	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.5	1号墳 T6	褐褐色	縦柄鉢	底付	—	—	4.3	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.6	1号墳 T6	褐褐色	縦柄鉢	底付	—	—	4.6	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.7	1号墳 T6, T12	褐褐色	縦柄鉢	底付	—	—	4.6	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.8	1号墳 T6	褐褐色	縦柄鉢	底付	—	—	4.05	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.9	1号墳 T6	褐色土	縦柄鉢	底付	—	—	4.5	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.10	1号墳 T6, T12	褐褐色化 20cm	縦柄鉢	底付	—	—	4.0	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.11	1号墳 T6, T12	表土	縦柄鉢	底付	—	—	4.5	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.12	1号墳 側面	褐色表面	縦柄鉢	底付	—	—	4.5	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.13	1号墳 側面	褐褐色	縦柄鉢	底付	—	—	4.2	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.14	1号墳 T6	褐色土	縦柄鉢	底付	—	—	4.0	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
12.15	1号墳 T6	褐色土	縦柄鉢	底付	—	—	4.46	内・外: 黄褐色、縫合ナメ	内・外: 黄褐色	直筒
13.1	1号墳 T6	褐色土	縦柄鉢	底付	—	—	7.5	内・外: 黄褐色を表すからナメている	内・外: 黄褐色	直筒
13.2	1号墳 T12	褐色土	縦柄鉢	底付	—	—	8.2	内・外: 黄褐色	内・外: 黄褐色	直筒

土 器

遺物番号	出土位置	出土土層	種類	直縫	法量 (cm)			測定・手元の特徴・文様	色調	備考
					口径	底径	高さ			
13-3	1号墳 T6	褐色土	直縫瓶	直縫	-	-	(13.0)	内：灰白色 外：タヌキ目	灰・外：灰白色	
13-4	1号墳 北東隅	直縫瓶	直縫瓶	直縫	-	-	(12.0)	内：灰白色 外：タヌキ目	灰・外：灰白色	
18-1	2号墳 砂利地盤上	直縫瓶	片蓋	13.7	-	-	3.8	内：ヘラ切り縁ナデ、回転六つ折り、回転ナデ 外：14軒ナデ、撫子ナデ	灰・外：灰白色	測定3周
18-2	2号墳 道面地盤上 T2 西側	直縫瓶	片蓋	-	-	-	(13.0)	内：回転ナデ、撫子ナデ 外：14軒ナデ	内・外：灰白色	測定3周
18-3	2号墳 砂利地盤上	直縫瓶	片蓋	10.11	-	-	(12.9)	内：回転ナデ 外：14軒ナデ	内・外：オリーブ灰白色	測定6回(周)
18-4	2号墳 砂利地盤上	直縫瓶	片身	-	-	-	(2.2)	内：灰白色	測定3周	
18-5	2号墳 砂利地盤上 T2(西側)北側	直縫瓶	片身	(11.0)	-	-	(18.0)	内：回転ナデ、撫子ナデ 外：ヘラ切り縁ナデ	灰・外：灰白色	測定3周
18-6	2号墳 砂利地盤上 T2(西側)北側	直縫瓶	直縫 瓶底	-	9.30	9.00	-	内：回転ナデ 外：14軒ナデ	内・外：灰白色	内面に△のへら記号、出張跡
18-7	2号墳 砂利地盤上 T2	直縫瓶	直縫	-	-	-	(8.0)	内：回転ナデ 外：14軒ナデ	内・外：灰白色	測定3周
18-8	2号墳 砂利地盤上	直縫瓶	直縫	-	-	-	(2.5)	内：回転ナデ 外：14軒ナデ	内・外：灰白色	測定3周
18-9	2号墳 T2(西側)南側	直縫瓶	直縫	-	-	-	(5.1)	内：2回切縁ナデ 外：カヌイ目	内・外：灰白色	
18-10	2号墳 砂利地盤上 T2(西側)南側	直縫瓶	直縫	-	-	-	(2.0)	内：回転ナデ 外：14軒ナデ	内・外：灰白色	
25-1	3号墳 T8	直縫瓶	直縫	(10.4)	-	-	(0.0)	内：回転ナデ 外：14軒ナデ	内・外：灰白色	測定3回(周)
25-2	3号墳 高台	直縫瓶	直縫	-	-	-	(2.0)	内：回転ナデ 外：14軒ナデ	内・外：灰白色	測定3周
25-3	3号墳 砂利地盤上	直縫瓶	網状か 瓶底	-	-	-	(18.0)	内：2回切縁ナデ 外：カヌイ目	内・外：灰白色	測定3周(周)
25-4	3号墳 砂利地盤上	直縫瓶	直縫	(18.0)	-	-	(0.0)	内：2回切縁ナデ 外：14軒ナデ、タヌキ目	内・外：灰白色	内面焼がかかる
25-5	3号墳 高台 - 2 級 T8(西側)	直縫瓶	直縫	(16.0)	-	-	(7.0)	内：2回切縁ナデ 外：14軒ナデ、タヌキ目	内・外：灰白色	内面焼がかかる
25-6	3号墳 高台	直縫瓶	直縫	-	-	-	(10.0)	内：2回切縁ナデ 外：14軒ナデ、タヌキ目	内・外：灰白色	内・外：灰白色
25-7	3号墳 T8	直縫瓶	直縫	-	-	-	(16.2)	内：2回切縁ナデ 外：14軒ナデ、タヌキ目	内・外：灰白色	内面焼がかかる
25-8	3号墳 T8(西側)	直縫瓶	直縫	-	-	-	(6.0)	内：2回切縁ナデ 外：14軒ナデ、タヌキ目	内・外：灰白色	

石製品

遺物番号	出土位置	出土土層	種類	直縫	法量 (cm)			重量 (g)	色調	備考
					最大幅 (mm)	最小幅 (mm)	最大厚 (mm)			
13-5	1号墳 T6	褐色土	有邊石斧	有邊石斧	9.0	-	5.5	4.15	254	北部九州型・B A型
13-6	1号墳 T6	褐色土	有邊石斧	有邊石斧	8.9	-	5.8	2.8	250	北部九州型・B A型
13-13	1号墳 T12(東側)	-	小刀	小刀	0.3	-	0.1	0.2	0.03	緑色
13-14	1号墳 T12(東側)	-	小刀	小刀	0.3	-	0.1	0.3	0.03	緑色
26-2	3号墳 T8(西側)	-	小刀	小刀	0.5	-	0.15	0.35	0.12	緑・緑色

鉄製品

遺物番号	出土位置	出土土層	種類	直縫	法量 (cm)			重量 (g)	色調	備考
					最大幅 (mm)	最小幅 (mm)	最大厚 (mm)			
13-7	1号墳 T12(東側)	-	打金丸	打金丸 内側の内縫 L1	0.7	-	0.6	0.45	3	
13-8	1号墳 T12(東側)	-	刀子	(2.6)	-	-	1.9	-	8	
13-9	1号墳 T12(東側)	-	刀子	(3.45)	-	-	1.4	0.6	2	
13-10	1号墳 T12(東側)	-	打金丸	打金丸 内側の内縫 L1	0.7	-	1.3	0.35	1	
13-11	1号墳 T12(東側)	-	刀子	(5.3)	-	-	0.4	0.6	6	表面無
13-12	1号墳 T12(東側)	-	斜刀頭器	(4.5)	-	-	0.2	0.15	1	
26-1	3号墳 T8(西側)	2次埋積土	金環	2.2 × 2.3	-	-	0.6	-	53	2枚の半分程度に鍛造が残るが手書きで

写 真 図 版



海崎古墳群調査前全景（北東から）



海崎古墳群調査後全景（北東から）

図版 2



1号墳調査前全景(南から)



1号墳調査後全景(南西から)



1号墳埴丘南東側 (T3) b-b' 土層断面 (南東から)



1号墳玄室右側壁裏側
(南東から)



1号墳墳丘 c-c' 南東側土層断面（南東から）



1号墳墳丘 c-c' 北東側土層断面（北東から）



1号墳玄室（北東から）



1号墳玄室左側壁（南東から）

図版 6



1号墳玄室左側壁と閉塞石
(北東から)



1号墳玄門（北東から）



1号墳玄室右側壁（北西から）



1号墳玄室奥壁（南西から）

図版8



1号墳南西側（T6）
石材・遺物検出状況
(南西から)



1号墳南西側（T6）
石材・遺物検出状況
(北西から)



1号墳南西側（T6）
遺物出土状況
(南西から)



1号墳南西側羨道部
石材検出状況（南西から）



1号墳羨道部石材検出状況（北西から）



1号墳羨道部
(東から)



1号墳羨道部
腰石検出状況
(東から)



1号墳羨道部
腰石検出状況
(南西から)



2号墳完掘状況（北東から）



2号墳南東側（T2）土層断面（北東から）

図版 12



箱式石棺検出状況
(北西から)



箱式石棺完掘状況
(北西から)



箱式石棺掘方
完掘状況(北西から)



3号填完掘状況（北東から）



3号填南西侧法面土層断面（南西から）



3号墳玄室（南西から）



3号墳玄室奥壁（南西から）



3号墳玄室左側壁（南から）



3号墳玄室右側壁（南西から）



3号墳玄室天井石（南西から）



3号墳玄室右袖石（西から）



3号墳南東側外護列石（南から）



3号墳北東側（T8）外護列石と周溝（北東から）



3号墳北東側 (T8)
土層断面
(北東から)



3号墳
T8 南西端土層断面
(東から)



3号墳
T8 南西側土層断面
(北東から)



SK01 完掘状況
(北西から)



SK02 完掘状況
(北西から)



SK03 完掘状況
(南から)

図版 20



SD01 完掘状況
(北から)



T5 完掘状況（北東から）



T7 完掘状況（南東から）

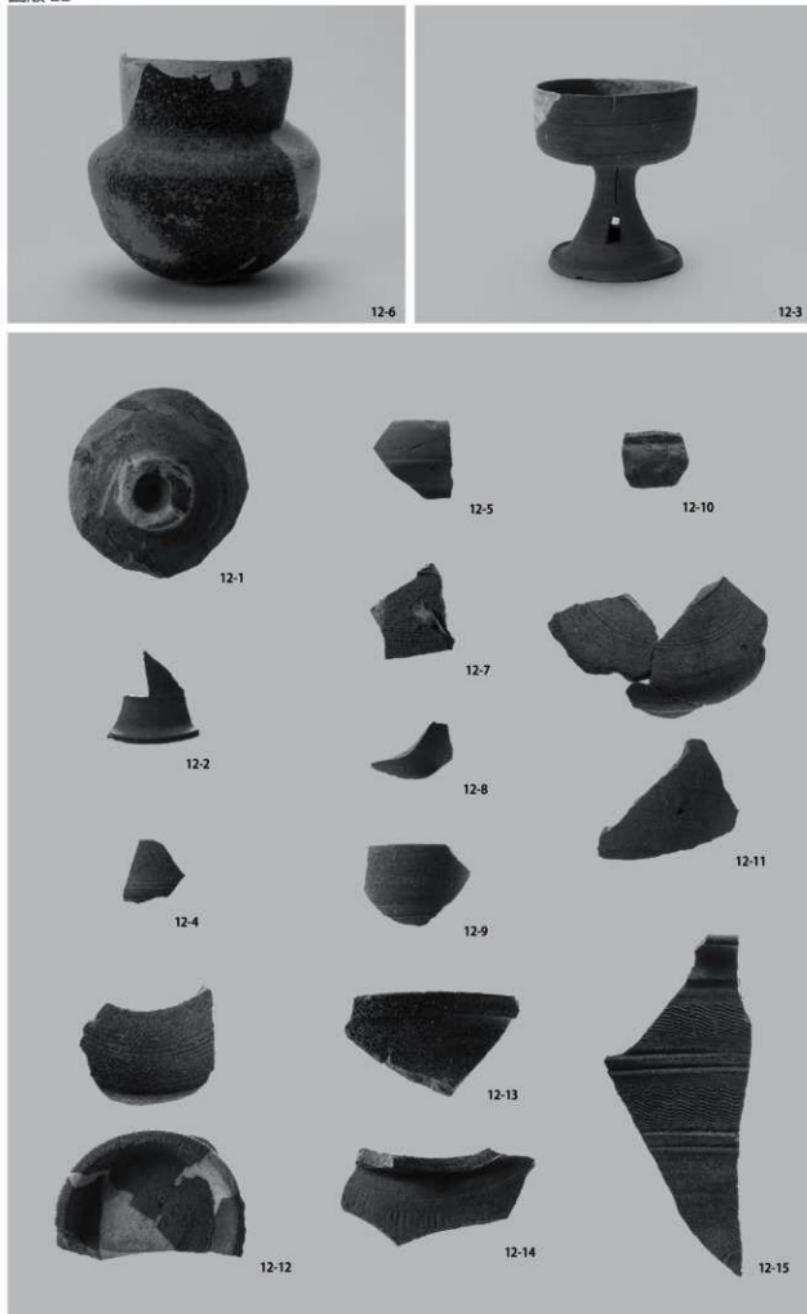


T1 完掘状況
(北西から)

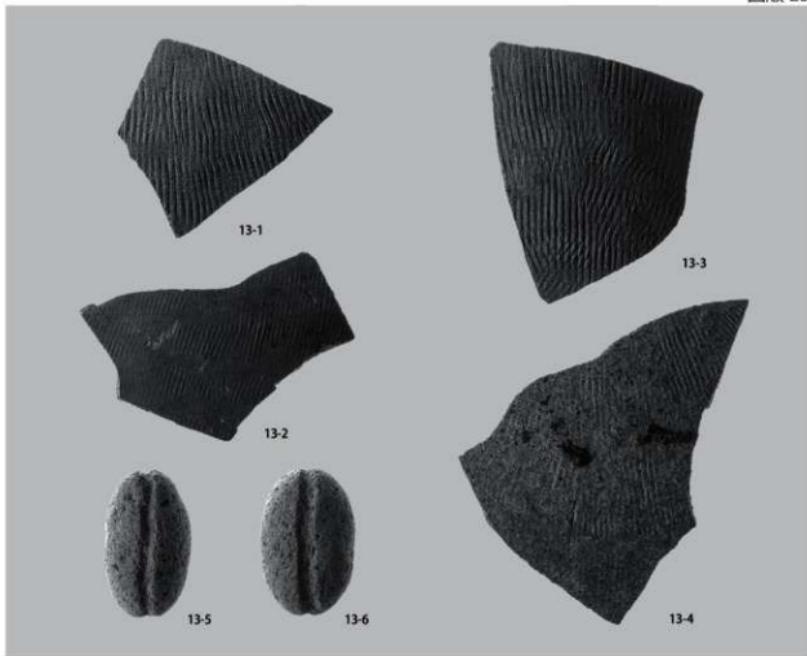


1号墳出土遺物①

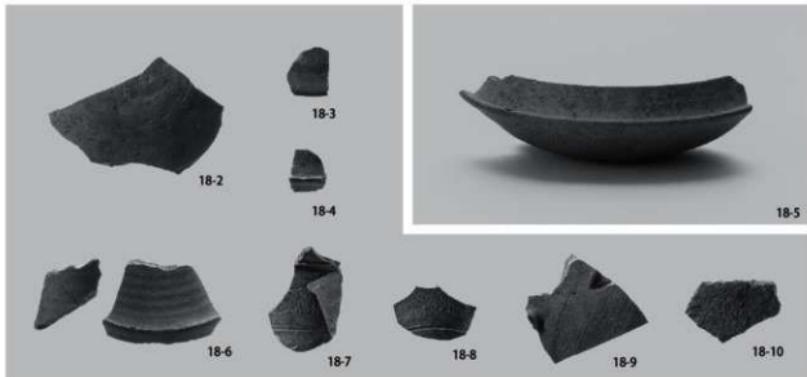
図版 22



1号墳出土遺物②



1号填出土遗物③

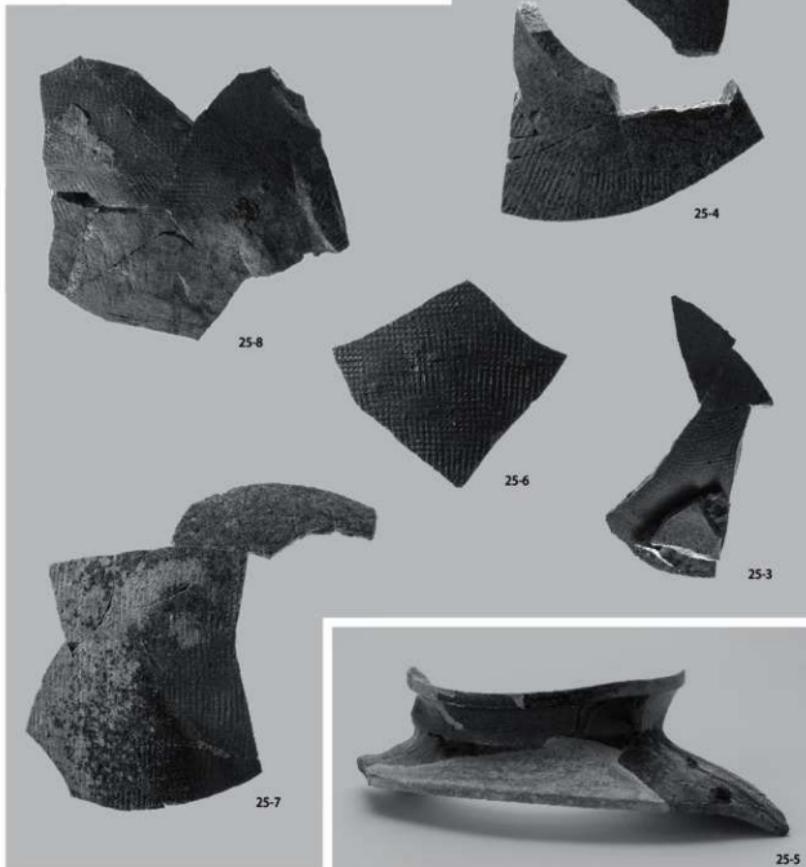
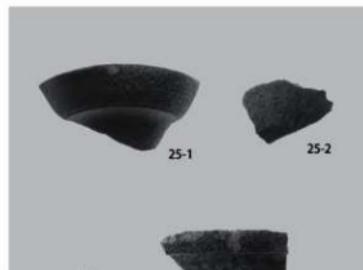


2号填出土遗物①

図版 24



2号墳出土遺物②（箱式石棺）



3号墳出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	かいざきこふんぐん						
書名	海崎古墳群						
副書名	市道才軽尾線道路整備事業に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第187集						
編著者名	廣濱貴子						
編集機関	松江市教育委員会 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室)						
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL:0852-55-5284 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団(埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL:0852-85-9210						
発行年月日	2018年9月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
かいざきこふんぐん 海崎古墳群	島根県松江市 美保関町美保関 1244番1	32201	I-17	35° 33' 41" 133° 17' 45"	20170822 ~ 20171114	131.6m ²	道路 整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
海崎古墳群	古墳	古墳時代	竪穴系横口式石室 横穴式石室 箱式石棺	須恵器 土師器 石製品 金属製品	古墳時代後期(6世紀初め~7世紀初め)に営まれた古墳群である。1号墳と3号墳の石室形態には違いがみられ、異なる系譜を引く石室を順次導入している。		
要約	海崎古墳群は丘陵尾根上に築造された3基の古墳で、1号墳は竪穴系横口式石室、3号墳は横口式石室をもつものである。今回の調査では、1号墳石室の南西側に羨道がとりつくこと、2号墳では小型の箱式石棺、3号墳では外護列石を確認した。石室の形態は鳥取県伯耆西部と類似したものであり、出土遺物のなかにも同地域と類似するものが出土していることから、美保湾を介した首長間の交流が窺われる。						

松江市文化財調査報告書 第187集
市道才軽尾線道路整備事業に伴う発掘調査報告書

海崎古墳群

平成30（2018）年9月

発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財團

印刷 有限会社 松陽印刷所株式会社
島根県松江市学園南2-3-11